

---

# カオス・クロニクル

岡村 としあき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カオス・クロニクル

### 【NZコード】

N3140Z

### 【作者名】

岡村 としあき

### 【あらすじ】

MMOの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあつた。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが出会い。

\* MMOの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

## 押し切れなかつたEnt er

一瞬の迷いが命取りになる。たつた一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善をつくす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体躯をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでオレの役目。

田の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアンントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が人一人入るのがやっとだつた。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロイネーちゃんがマリアベル。大男がパックン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パックンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パックンは笑う。シュレンのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から沸いて出たアリに、マリアベルが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリアベルの足元に六芒星の魔方陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となつて大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持つているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリアベルと同様の六芒星の魔方陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシユレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シユレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シユレンの掛け声で士気があがつた。パックンもマリアベルも、やる気をだきらせていく。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シユレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まつた。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ～、またよろ～～～」

「おつですー」

「おつかれ～～」

オレ以外のメンバーはそういう残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行つた。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たつたそれだけの事を、一瞬躊躇つた。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはあるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分が。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。BackSpaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれつきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもつと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になつた。

## 出会い系とターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しそぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2・3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見る影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になつた事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかつた。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかつた。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの変わりに育成する、育成代行が蔓延り、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になつて、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

つた。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

MOBだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。『苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「”ビもつすー。今ヒマしてません？ よかつたら悪魔の森にでも行きませんか？？”

「”どうも。他のパーティに誘われちゃったんでまた今度お願ひします”

「"りよーかーい^\_^"」

『苦労な連中からたくさんのおいしー』。プレイヤー間同士で会話をするウイスパー モードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断つて、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で聞くべきじゃなかつたな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPボーションが切れていたので買出しにいくことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかつた。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまで道のりで、他のプレイヤーとすれ違つ事はなかつた。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずい。この当たりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、田的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界によひやく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いや  
すいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んで  
おくようにしている。他にも何か切らしている物はあつたかな？  
とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起つた。

ラグの原因は田の前……それを見てオレは声をあげそうになつた。  
恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？ そ  
れらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようになつてい  
る。

大量に集めて範囲スキルをブチ込むまとめ狩りだろ？ それ  
とも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立つ  
た時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイ  
ヤーは戦闘不能になつたらしい。

いつたいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思つ。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。  
エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した人造人間ホムンクルスだ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごつこの果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまふが唯一にして最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごつこ。凄まじいまでの戦闘力を持ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あつてもなぐとも同じ0に等しい防御力と、一撃食らえれば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者が、よつぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの田の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらにはかけてやる。久しくお田にかかるといつエイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれないな。

しかし、30秒立つても、1分立つても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思つて、その場を離れかけたときだ。

「おんがいすますしゅ」

「はあ？」

意味の分からぬ、初めて耳にする……いや、初めて田にした言語だった。SMとか言つてるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだつたらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フニブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこにつの出会いで、ターニングポイントだった。

## フェイブナイト

「助かりましたあへへ」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゅっきゅっと飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。…… punpun321という名前だ。なんだこりや？ プンプンむんにーいち？ マジでキレる3秒前とかいう意味か？

「punnun321ですへへへ プンって読んでくださいね」

ブンはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使つたんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかつただなんて」

「ブンはネタ師じゃありませんよお～～～ 頑張つてレベルを上げていたのです！ そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄つてきちゃつて……」

「どうやら、無闇にMOBの群れに突つ込んだ拳銃、大量にリンクさせてしまつたらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！ 蘇生ありがとうございますへへへ」

ブンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。ブンのシリバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スクリを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

ブンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになつていて、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったブンが、さつきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去つてしまつてもよかつたのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こつても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウイスが来たら鬱陶し<sup>うつとう</sup>い。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「ブンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくんへへ！」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイスクイルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとつてもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向かわせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どこのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかんせん数が少ない。敵のターゲットを集めると、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならロープを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまつ。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使用できるのだが……そこまでマゾな奴はそういうない。

こいつは、何でこんなマゾいのを選んだだろ？……ふとブンを見

ると、いつの間にかM.O.Bの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さつきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

チャットとキラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まつたブンはボコスカM.O.Bに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさっきのセリフが流れただが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそつ。

初心者に関わると口クな事がないのは、オレ自身がよく知つてゐるはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知つただろう?

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「パン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったブンにそう問い合わせる。

パンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、じゅらり振り向いた。

「入ってるよーーーへへ  
これがブンの所属しているギルド『灰色の狼』

のギルドマントなのだ。『だ、マイッタか@@ミ』

背中をじりじり回して、ブンはさつさつた。

その小さな背中にくつ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

ブンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、ヒリアボス討伐を独占したり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人二ート共がほとんどだ。さつき組んだパックンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「ブン、それならギルメンに声掛けて育成手伝つてもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝つてもらつたほうがすぐに転職もできるだ?」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があつたわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、ブンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもつたいぶつてみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとCキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、ブンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われたへへへ、ギルメンなのに助けてくれないよーどりじょへ、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけとして、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くなってくれさいねー。とか言つてほつとかれる。周囲にすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所は無い。

孤独なのだ……ブンは。

狩り場に行つても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできないし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろう。

かわいそうと言えればかわいそうだが……。ボランティアで友達につこなんてオレはほんめんだ。

「ねえ、エルくん?」

フンがオレに疑問形で何かを問い合わせる。解つている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出来る前に。

フンよつも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて! フンがんばって狩りつまくなるから^\_^」

オレの言葉よつも早く、フンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなつて、Enterを押されるのを今か今かと待つている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をフンに伝える。

## 『彼女に送るプレゼント』

「あらがとうございましたあ」

能天氣そうなセリフを背中に受け、村の道具屋から一歩外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはフレイバーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーカー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセットなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し込められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばつている。両親がそれを見るたび溜め息をついて『片付け』といつるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の堀にそつて外に向かつ。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせていく。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフュイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わつたか？」

「うん、ヒルくんのおかげだよー ありがと'▽'」

ブンがオレに近寄つてきて、飛び跳ねる。子犬のよつな奴だ。

「レベルも15になつたから、違つ村に行けるね、やつたー^ ^」

「そりが、15になつたか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知つてゐる」

「ほんと@ @ お世話になります、歸丘ミロ（――）ミペコフ

ようやくナイトになつたブン（装備だけだが）を背中に、ハリの村を出る。

田描す先は、ミロンの村……近くミロブリン前線基地といつ、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこのつのレベルを上げる。

「ブン。ちよこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛け るぞ」

「ひやあ、助けて@@ー。」

前の前にすでに「パンは何匹かのウホアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で呪きのめし、静かにわせた。

「うわあ、ヒルくん強いー！」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル一のウホアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、一歳年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういうえば。

「電気あんま（？ー？）」

パンが頭を疑問符でいつぱいにしている。

「なにそれ、楽しいの？ パンにもやつしてみて、ヒルくんへへ」

「ぐぐつてある。その上でやつてしまふことこのなう、オレの奥義を見せてやるわ」

「うわあーーーへへ」

パンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウホアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル40になれば……。  
そうなれば、用済みだ。

オレはプンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

一人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以上は1・2倍。40未満は2倍になる。

わざと、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……。プンのような問題児を抱える気にはとてもなれない。

プンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合つて、あとは狩り友を作らせて勝手に40になつてくれればいい。オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、プンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。プンの奇行に振り回されるのも、プンのお世話係をするのも、今だけの……。

「つておこ、プンー、どこ行った！？」

気が付けば、パンの姿はビリにもなかつた。ゲームから落ちたか？

「ううだよおおお……」

ビリからうもなぐ、パンの泣きそつな声（本田6度田）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくパンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本田23回田）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃつた。てへ（^ - ^ \* ）」

何がてへ（^ - ^ \* ）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

パンのHPは川に落とした時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になつて、ミロノの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になつたばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

せつと40レベルになつてオレから卒業してくれ、パン……。

## 初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぽい取つてくるね、獲りたてはきっとおこしいよへりへじゅるり』などと言つて、犬搔きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになつていた。

リターんを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並ぶ、閑散とした風景に早変わりした。

「ヒルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよー お肉ばっかり食べてたらダメなんだゾー ふんふん♪♪

「お前はアホか」

プンがふんふん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩つたところで手に入るるのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよー プンだもん♪♪」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあつたな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いでて……一緒に泳いだことが縁で狩り友になつて……色々な所に行つてバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまつて、ザコMOBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴つたら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

ブンもそうなのか。今のブンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとつては……ヒマな時間を潰す、『ミニ箱みたいな所なのに……。

ブンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思つているほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言つても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平氣な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達『』この果てにあるのは、残酷な結果だけ。

ブンにもそれを教えてやらなければならない。実際、ブンだつて

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

「フンなら、解るはずだ。」

「つて、またか！ ディ行つた、フン！」

「ヒヒおおおおお…」

「なんと、すぐ真横からフンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。」

「フンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何もない。すると急に、石の壁から人の顔が生えってきた。」

「うわあああああー…？」

「壁にめり込んだじゃつた、もひお嫁にいけない、つ…ぐすん」

「移動不可状態になつて、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、フンを救出すると、村長からクエスト『ゴブリン討伐』を受けたが、当初の目的地、ゴブリン前線基地へと向かう。」

「村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。」

「テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突つ立つて立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。」

彼女の前に立つと、パンにゴブリン前線基地へのテレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で田の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

BGMも、それまでのどかだつた村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言つても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆つているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもかつて高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいっても、HPをナメてかかると痛い目に合ひ。IJKのMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまつたら……その時は終わりだと思つたほうがいい。

数匹のゴブリンを引き連れて戻つてくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコMOBと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フライグのパンでせんべいを呪むだけだ。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何  
も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてパンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ロープ装備のオレでも十分に耐えられる。

その隙にパンで各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやつている暇はない。明田は仄耀口。学校もあるし、0時には寝てねたい。

「行くぞブン。オレについて来い」

「あい！　＠＠ゝ　なんだかエルくん、頼もしい。もしかして、エルくんて弟さんが妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴょいぴょい付いてくるパンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、一つ下の泣き虫な弟が一人」

「やつぱりー！ ハルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^\_^」

「違つよ、オレは

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「ブンはね～。一人っ子なんだあ。いいな～兄弟へへ」

「そうか

「エルくんエルくん！　エルくんはどんなお仕事してるの？　ブンは高校生だよへへ」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのブンも、のほほんとして、天然なヤツかもしねりない。

「エルくんつて落ち着いてるよね～@@　もしかして、30代の大人才つたりする！？　キャラーー渋い！」

「誰が30代だ！？　オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！　あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。ついつい熱くなつて個人情報を一部だが開示してしまつた。にしても、なかなか失礼なヤツだな、ブンは。

「えーーー@@　同じ年なんだ～エルくんつてやつぱつす～いんだね。ブン、尊敬しちゃいます～～～」

「どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やつぱこいつ、苦手だ。ベースを崩されると、行動が読めない。」

「…………いいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前述の小屋もあるしワントランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になつてている所に、木でできたお粗末な小屋……その周囲には、6匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイヤーが突つ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから20以上高い。

ゴブリンの群れに突つ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴らから袋叩きに合つが、ダメージは一ヶタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、ブン！」

「あい！　@{@^」

ブンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の斬撃を繰り出すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、消える。

やはり、ナイトであつてもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウオーリア並みである。

瞬く間にブンは全てを平らげる。思ったよりもブンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかかるないかもしない。

時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思つて移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のSEや、ダメージを食らつたときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そのプレイヤーとブンと一緒に狩らせよう。一人が狩り友になつてくれれば、ブンの育成をそいつに任せてしまえる。

「ブン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか?」

「欲しい——」

「なら、ちょっと行ってみよう」

ブンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂いていた。

「オーケだ。オーケウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おぐの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだらう。

かつこよくなれば、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールホールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はつきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「ブンもオークにすればよかつたのにな」

「えーー嫌だよ、かわいくないもん」

あのオークの大男がブンのよつなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなり。

「フェイブでよかつたな、ブン」

「@@"」

オークがその場にいた「ブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかつたらこの子と一緒に狩りをしませんか?」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があつて、返事がきた。

「ねを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もシラボーンですぞ（・・・）」

「じつちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしなくておく」

「ねを。ほんじゅお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきました」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですよ。ぼくちんのメインキャラだつたラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……「ロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニコータイプに覚醒できないと思いますて」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、ロロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すこい理由があつたんだね@@@… まむね321だよ～ プンつて読んでね～～」

プンがヤマモトの前に出て、へんつて踊つてを見せた。

「ぬお。フニイブツ娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマモトおもしろいーこへへ ぬいじくねー。」

またひらりと舞ったパン。ヤマモトは無意識であっちこっちにいったりと、パンの周りをうろちろしていた。

「何やつてんの、ヤマモトっ。」

「どのアングルが、一番ベストかなって、由つていいよねえ。つぶふ。中尉もそう思わんかね？」

「へへ？」

パンはヤマモトの変態行為に付いていらないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態がー やつぱりお前はーーー あっちいへ、しつしー。」

「ぬお。変態とは失敬なー。僕は

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオーケーの固体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だー。」

## GMホールは慎重に

「変態と開き直ったヤマモト。むれ抜っこ、墨抜っこ、血抜っこ。そして、今もなおパンの背後を動き回つてゐる。『変態の鑑のような男だ。』

はつと黙つて後悔してゐる。ヘタをいじり、パン以上に厄介な存在かもしれない。

「やつぱここや。他を逃たぬでわざわざ」

「いのつ事は、やつと黙つてしまつた方がいい。失礼だが、なんとなく危ない香りがするのだ。」

「そんな！ ぼくちん、パンちゃんの為なら何でもやるよー。」

「やつだよ、エルくん。ヤマモトかわいやつだよーへへ」

パンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシヤルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座つて、『パンちゃんおパンツ鑑賞会 ハアハア』をビリビリと開催してゐる。

「ぬを。心優しき我が女神！ あれですか！？ あなたは死なないわ、私が守るもの。でござりまするか！？ ぼくちん、パンちゃんとシンクロ率100%オーバー！ パンちゃんに向ひて、ぼくちゃんのHントリー・プラグ強制射出！」

最後のはトネタじやないか。もつ我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいパン。GMコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。つてGMさんで伝えるんだ」

「はーいへへ」

その後に、『もちろん冗談だ』とパンにウイイスを送つておぐ。

「ねお、GMコール（。。。）」

GM……たぶん、ゲームマスターという意味だと思つ。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、GMにメッセージを送る。それがGMコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。パンだって、解つてのはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を書つて付きまとつなり」

「エルくん、終わったよへへ」

「ん？ 何がだ？」

「GMコールへへ 田の前に変態さんがいますへへ 私襲われそうで怖いです；； 捕まえてください！ つてGMさんにメッセージ送つておいたの」

「……」

「ガクブル（（。 。 ））」

「ブン、やればできる子なんだよ。いえーいへへへ」

「お前はアホか！ 本当にやるなんて何考えてんだー。そもそも、冗談だつてウイス送つておいたろうがー！」

「えー————； あ、ほんとだあ、気付かなかつた。あは。（ ）○」

あは。（ ）○じやねーよ。

すると突然、ヤマモトがフェードアウトして消えて行つた。またか。

「……噂で聞いたことがあるな。規約違反してGMに睨まれたら、特殊なフィールドに転送されるつて……」

「え！ ヤマモトさん……！」眞福を祈ります（ ^人^ ）

祈るな。

しかし、また突然「つい縁の巨人が現れ、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ヤマちゃんふつかああああつー なんか回線の調子悪いみたいだつたけど、直つた！」

回線が切れ落ちただけだつたか……。

「おかえりヤマちゃんへへノ プンにつぱい心配しちやつたよお  
せつきまでい冥福を祈つていたお前はどういつた。

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あつちで一緒に狩り。  
オレがMOB引いてくるから、ポンと同じのを攻撃してくれ」

なんだかんだで、貴重なポンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日は  
だけは我慢してやる。今日は。

それからせつきまで、ポンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、  
ヤマモトを加えて再開する。

ポンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありつ  
たけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こいつ時は助  
かる。

オレがMOBを引っ張る。ポンとヤマモトがそれを倒す。オレが  
MOBを引っ張る。ポンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ  
20分は繰り返した。

その成果で、ポンは瞬く間にレベルが22になり、ヤマモトも2  
5になつた。

ヤマモトの火力もまた相当なモノだ。ポンと違い初心者ではない  
ので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使つ  
タイミングが絶妙だ。

「」のままレベルが上がつていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色々なパーティーから引っ張りだこになるだろ？。

……これさえなれば。

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「うぬせ」」

ヤマモトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいふらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙 斬！』とか、『オレのこの手が光つてうなる』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言つていた。

何を言つてゐるのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦つてゐるときのパンちゃんかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言つな、オタクが」

「エルくん、ハアハア～♪」

「パン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア～♪」

「ハアハア～！ あーも～、10分休憩！ オレ、飲み物取つてくる～。」

「こり～～～」

「あ、ぼくちん～～～でいいよー。ストロー付けといてね、あと、おこしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマモトアキラ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもつ寝てしまつたらしく、リビングは真っ暗で誰もいなかつた。

時計を見ると、すでに11時を回っていた。もう少し狩をして、今日は終わる。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口呑む。

やはつ、コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、『ほかない』よう『パソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。HPが0になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のようだ。離席しているのか、キャラが突っ立つたまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、1000を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けたMOBはない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何かが横切つて行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

PKだ。

PKとは、Player Killerの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……Player VS PlayerのPKとは違う。

高レベルプレイヤーの一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というPKは、1年前からずっと活動を続いている有名なPKだ。

種族はダークエルフ。職業はローダーで、レベルは60代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した一振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタッフ』は高いHPを誇るオーラクでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面上に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はPKギルドのギルドマスターで、うかつにPKをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にPKとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

いや……落ち着け。確かに持ち物の中には完全に経験値を復旧させる『神秘の復活薬』があつたはずだ。ブン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減つた経験値は取り戻せる。

とにかく今は…… プンとヤマモトを早くログアウトせらるか、村に帰還してもうつかない。

「あー、パンヤマアーティストへログアウトです。」

しかし返事は無い。まだ席を離れたまらしい。どうする……？

ブンが能天氣にも今帰つてきたらし。

「あれ?  
エルくん何してるの?」

「バカ！ パケられたんだよ、一旦ログアウトしろ！ もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかつたへへ』。そのブンのセリフが画面に表示されたのと同時に、短い悲鳴がして、ブンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまつ。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフローグらしい殺し方だ。

「ヤマモト……このならすぐログアウトしろ。」

「ぬを。何でこれー?」

「P.Kだ。早くログアウトしろ。20分後にはまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れてこるはずだから」

「わかった。ぼくちんがP.Kしきゅやる! プンちゅんをここんだけしかりん格好にしたP.Kは許せん! ハアハア」

「やめろって! 相手はレベル60代のダークエルフローグだぞ! 生き残つてるのはお前だけなんだ! 神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して!」

しかし、ヤマモトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマモトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタッフ』が。

しかし、スキルは失敗してしまつたらしく、ヤマモトのHPは1

ミツも減っていない。ヤマモトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一難ぎ。それも軽くかわされてしまつ。

斬魔が消える。ヒツヤヤマモトは背後に振り返りデュアルスタッフの一撃に備えようとする。しかし 斬魔が姿を現したのは、ヤマモトの背後。

つまり、もともとヤマモトの正面に圧しつもりでいたのだ。

斬魔がヤマモトに攻撃を仕掛けた。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すら見えない。

しかし、ヤマモトはそれに耐える。まったくHPが減っていない。

……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見てみる。ヤマモトのHPが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマモトをすぐによじよつともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！ ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマモト。通常のチャシトではなく、ヒリアー帯に響き渡る、シャウトでさうば。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たる気配を見せない。

当然だ。40近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「……オレがガダムだ！！！」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中した那一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアwww テラワロスwww

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそう呟く。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめると言ったのに……。

斬魔はすぐここを去り、不意にヤマモトへと向かって歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さり、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ撒いて、周

囲を埋め刃べす。

「ハリは縁のゴリ箱。あーへつむ。ゴリはゴリ箱に捨てやう俺様  
ソコグリエ」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまつだらう。

せつかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……こつらは平然と踏みにじつて、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリストートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなら……。『本当のオレ』なら……こんなヤツ、簡単に……。

リストートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ヤマちゃんをこれ以上いじめるな」

ブンだつた。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのブンがいない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻つたあと再びハリに……戻ってきたのか。

「www」

ブンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フュイブつてwww ちよおまwww」

斬魔は依然座つたままである、それでも攻撃が当たらない。だが、ブンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんwww しかも、灰色の狼つて。これは戦争やなwww」

斬魔はやれやれと言つた感じで、起き上ると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げるブン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かつても、どうしようもないんだ。だから、もうやめる。

そして、再び姿を現した斬魔。

ブンは背後を取られて。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の中年青年に。

フュイブナイト。フュイブナイトの青年である。

「@@?」

パンは何が起きたか理解できず、その場に立ちつくす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、  
ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かつて走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構  
える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回  
り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが体全  
体に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタ  
ップを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにス  
キルが不発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「パン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト  
……フェイブナイトの魔王だ。そしてあれが、60レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……』

## 桺、舞う

ヴァンガード。確かに英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持つている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだらう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力2300 防御力 560なら、それが攻撃力560  
防御力 2300となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。桺はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はつきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であつたりする。

そのお陰か、1年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー1の地位にいる。

その査が……田の前にいる。

何故ここにいるのか？ 理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るPKなのに對して、査はPKを狩るPKKなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかもしれない。斬魔に對して個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが査に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、査の前に現れる。査はすぐさまヴァンガードを展開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

査はナイトでありますながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは一人が戦っている間に、ブンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもううと、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の査に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。査は不意打ちに備える。しかし、5秒経つても10秒経つても奴の姿は現れない。

「あ！ エルくん下見て！」

「ブンの言うとおり、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があつた。  
……逃げたか。

「ブン、ちょっとあの人にお礼言つてくるねへへ」

ブンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した柵に駆け寄つた。

「助けてくださいありがとうございました」

早速、打ち間違えたらしい。

「いえ、別に。PKを潰すのが趣味なんですね」

柵は素つ氣無くそう答える。

「強いんですね、ビックリしちゃいました@(@@」

「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」

「カインさん（？）（？）」

「ああ、初心者の人ですか？ なら知らないのも当然ですかね。力インさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。俺も初心者だった頃、色々お世話になつたっけ」

「へえ、その人。今はどつしてるんですか？？」

「一年前くらいに……ちょっと事件があつてね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はやつしこるのか…

…

桜は、背中を向け」の場を去つてゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り…頑張つて下さい。それでは」

次の瞬間、桜の姿はそこには無かつた。

「あの人、すつゝく強かつたね@ @@ プンもあんな風になりたいなあ～～～」

「ぬを。パンちゃんの好意がさつきのフュブ男に向かつている！？許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしく、田の前で桜が仇を討つてくれたこともあるのだらう。……逃がしてしまつたが。

「あれね。そういえば、ヒルくんつて桜さんと知り合ひだつたの？桜さんの事、詳しかつたみたいだし@ @」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知つてゐる。桜はPKKとしても有名だしな」

「ふーん、そうなんだあ。。。」

桜が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなつたんだな、桜。

# 目覚め リアル

桜が去つて、数分後。日付が変わつてすでに午前0時10分。オレ達は今日はもう、狩りを終えて解散することにした。

リターンを使用して、ゴブリン前線基地から一瞬でニロンの村へ。村の広場で輪になつて別れの挨拶をそれぞれ告げる。

ヤマモトがうなつた。社会人だつたのか、こいつ。もう少し落ち着いてもらいたいものだ。

「ヤマハさん、がんば〜〜〜！」

早く寝ろ

「あ～い。そんじや、ブンぢやん、女處おやすま～」

ヤマモトの姿はすぐに消えさせ、広場に残つたのはオレとブンだけとなる。

「エルくん。ありがとねー！ プン、今日だけでレベルが9も上が  
つたよ！」

本来ならば10上がったはずなのだが、斬魔にやくされたお陰で  
ブンのレベルは一つ下がってしまった。

「明日もまたじぶね」

明日……こや、今日の事か。インするわけがないだろ。お前に  
はヤマモトとこう、頼りになる狩り友ができたんだ。

「これ以上オレを……振り回すな。

「オレは、今日用事があつてインできなー

「じゃあ、明日だねへへー！」

「明日も用事がある」

「じやあ、明後日へへー」

「明後日も用事がある」

「明々後日も用事がある」

すると、急にパンから返事がなくなつた。沈黙する「」と3分……。  
そのままログアウトしてやるつたが、不意にパンが何かし  
やべりだした。

「「めんね、ちよつとギルドチャットで夢中になつてた

オレの事は無視してギルメンと仲良くなっちゃべりか。

「まあ、やうこい」だから、しばらへじへじへログインできない  
んだ。なんだつたら、ギルメンに声掛けてみりよ。あつとお前の  
育成手伝ってくれるつて

「無理だよ」

「は？ 無理ってことないだろ？」「

消極的な奴だな……。もう一言いってやるか。しかし、オレの言葉はブンの一言で遮られる。

「だつて……ブンのギルド……もうないから」

「え？」

「追放されちゃつたへへ； ブンが斬魔つて人に攻撃したから、それを理由に戦争を仕掛けるつていわれたらしいの」

あの時か……斬魔も確かにそんな事を言つていたな。

「だから、戦争を起こさないためにブンを追放するんだつて。じょうがないよね。みんなに迷惑かけたくないし。ブンが抜けてみんなが喜ぶんだつたら、しちがないよね」

あの斬魔がそれくらいで引き下がるとは思えないが……これが、今の灰色の狼のやりかたか。変わったんだな。

「だからね、ブン、もう一人だよ。でも、エルくんがいるから平気

^〇^」

「厄介な事になつた。狩り友ができたとはいえ、ヤマモトは社会人だ。そうなれば、学生であるオレ達よりもインする時間は短いし、平日は夜くらいだろ？」

となれば、同じ学生であるオレを頼つてくる頻度が非常に高い。ギルドすら抜けてしまつたブンに、もはや知り合つことはオレかヤマモトだけだ。

オレは一人がいいのに……。このままでは、ブンが40レベルになるのが遠ざかつてしまつ。他にも狩り友が必要だ。

くそ……仕方がない。もう少し付き合つてやるか。

「ブン」

「？」

「明日の予定なんだけどな、オレの見間違いだつた。明日はなんとかインできそうだ」

「やつたあ　　」

ほんの少しだけ……だけだ。以下の目標は、こいつに狩り友を作ること。オレがいなくて、一人で野良のパーティに行つたり、ソロできるだけのプレイヤースキルを身につけてもらひ。

問題山積みだな……。

「じゃあ、寝るな。ブン、お前もさつと寝ろよ、遅刻するぞ」

「おやすみ、エルくんへへ」

オレは、ログアウトした。

PCの電源を落とし、ベッドの上に頭から突つ伏する。すると突然眠気が襲い掛かってきた。

……風呂は朝起きたら入るわ。

それにしても、厄介なことになつたな。pum pum 321……リアルはどんな奴なのだろうか？

一度、顔を揉んでみたいものだ。

そんなことを考えているうちに……オレの意識は闇の中へと沈んでいった。

\* \* \* \* \*

眠い。これは相当に眠い。昨日、夜遅くまでゲームをしそぎたせいか……。

学校の自席で、俺は何度もあぐいをかみ殺した。なんとか遅刻せずに済んだものの眠気が何度も俺を襲つてくる。

季節は9月。夏休みが終わって、今だ休み気分が抜けきらないクラスマイト達は、朝から元気いっぱいであるせい。少しその元気を分けていただきたいもんだ。

と、まどろみながらそんな事を考えていると、チャイムが鳴つて担任が教室に入ってきた。

朝の挨拶と、連絡事項の確認。ホームルームも終わり去つていくのかと思いきや、唐突に教室の扉を開けて、外に向かつて手招きをしている。何だろうか？

クラスメイト達は皆、扉に注目する。そして、そこから一人の女子生徒が顔を出す。

同時に、クラスの男子生徒どもは、歓声をあげる。もちろん、俺もだが。

ゲームで例えるなら……カオス・クロニクルで例えるなら、エルフ。涼しげな眼差しと、柔らかいシルクの様な肩甲骨あたりまで伸びた髪。チョリーピンクの唇から紡ぎ出されるのは、どのよつな声なのか。

日本人形の様な美しい顔。胸も……適度に大きい。美少女だった。

「えっと……相羽 真理奈です。親の仕事の都合でこの近くに越してきました。転校してまだ右も左も解らないので、助けていただけると嬉しいです」

転校生……相羽 真理奈。担任からの紹介と自己紹介を終えると、彼女はそよ風のよつに優しい歩調で歩き、指定された席へ……俺の右隣へ舞い降りた。

「よろしくね」

柔らかい微笑み。微かに漂う石鹼の香りが鼻腔をつき抜ける。まるで、夢を見ているようだつた。

「あ、俺。渡辺  
翔<sup>翔<sub>くわ</sub></sup>。これからようじへ」

なんとか自分の名前を言えたが、俺は内心かなりどきどきしていた。こんなかわいい子が俺の隣にやってきた。どこぞのギャルげじやあるまいし、まだ俺は夢を見ているんじゃないかとも考えてしまつ。

ひつそりと右へと視線を向ける。ホームルームを終えた教室は、一時間目までの僅かな間に少しでも相羽さんと仲良くなつてやううといつ下心丸出しの男子と、自分達のグループに引きずりこもうと画策する女子達で人口密集地となつている。

転校生といつのは、それだけで話題性があるものだ。それもこんな美人じや、話しかけたくなるか。だが、俺にはお隣さんというアドバンテージがある。

何も焦ることは無い。

話しかける機会なんていくらでもあるや。わかつて、再び右へと視線を向けると……。

相羽さんの横顔を偶然視界に捉えることが出来た。

違和感。そуд、些細なことなのだが……そこに違和感を感じる。

すぐ右には、こぎやかなクラスメイト達を絵に描いたような光景があるのに、その中心の相羽さんは楽しそうじやない。

口は笑っているけども……目が笑っていない。

どれだけ価値があるのか解らない、ダイヤモンドのような輝きを放つキレイな瞳は、何も写していない……そんな気がした。

やがてチャイムが鳴り、クラスメイトはすぐに自分の席へと戻るため散っていく。そして、唐突に訪れた静寂。

相羽さんは緊張しているのかもしないな。転校初日に一気にこんなに話しかけられたら、ウンザリしてしまつかもしれない。そしておいてあげるのが、一番のかも。

やがて、一時間目の授業が始まり……一時間目、三時間目、四時間目が終わって、昼休みになった。

俺は席を立ち、学食に向つ。

「ナベ！ 学食？ 俺も俺も。一緒に食おうぜ」

クラスメイトの一人が俺に話しかける。そつそ、俺のあだ名はナベとか言われてる。一時俺の事をオナベとか冗談で言い出した輩がいたが、そいつにはデュアルスタッフ（割り箸でだが）を決めてやつた。

ナベとオナベじゃ意味が全然違うだろう。

数人のクラスメイトと一緒にじやれ合いながら学食へと向つ。適当に空いている席を見つけてそこを拠点に、半分を食券係りにして半分を拠点防衛に当たらせる。

俺と稻田というクラスメイトが席に残り、他の奴らを待つことに

なつた。

「なあ、相羽つてさ、この前お前が貸してくれたエロDVD出演してた、AV女優に似てない？ いや……この前のエロゲーのヒロインかな？」

自称エロゲー博士。通称歩く下ネタ製造機。それがこの稲田 大河という男であった。当然、クラスの女子からは嫌われている。

運動系の部活に入っているでもなく、スポーツ刈りでメガネをかけたその風貌は地味という言葉がピッタリと似合つ。

「ナベはさ……もう見たの？」

「何が？」

「相羽のパンツ」

赤面しそうになる。こんな学食のど真ん中で、パンツ見たのとか、ありえない。

「見るわけねーだろ！」

見たいけどな。そんな機会があるもんね。

ちなみに、稻田は純白が好みらしい。クマさんも捨てがたいらしいが……まるで健全な男子高校生の鑑の様な奴だ。もちろん見習つつもりなどないが。

……俺はしましまがいいな。

その後、稲田を放つておいて俺とクラスメイト達は昼食を済ませると、それぞれ学食で別れて昼休みの余暇を過ごすことになった。

俺は学食の隅にある自販機へと向かい、カフェオレでも買つこととした。財布の中から小銭を取り出し、一枚一枚入れる。

ボタンを押そうと手を伸ばしたとき、石鹼の香りがたちこめた。この香りには覚えがある。 そう、彼女だ。

相羽さんが隣に立っていた。彼女は一体、何を買おうとしているのか。普段なら、クラスメイトの女子が青汁を飲もうがプロテインジュースを飲もうが知ったことでは無いが、今日は特別気になった。視線は彼女に向けていないので、気付かれていないはず。そつと、慎重に。隣に視線を移す。

不意に俺の指先に何かが触れて、ガコン。と音が鳴る。足元の取り出し口を見ると、黒い缶が吐き出されていた。

「……あ」

間違えてボタンを押してしまった。しかも……缶コーヒーのブラックだ。

まずつた。今日はブラックという気分じゃない。少し甘いカフェオレが飲みたかったのに……。

「それ、どうしたの？」

と、ふと隣から小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「あ、相羽さん。いや……間違えちゃって。困ったな、俺、カフェオレ飲みたかったんだよね。もう一本買つか……」

「ちょうどい

「え？」

「私、ブラック好きなんだ。コーヒーはブラックしか飲まないから意外だった。女の子がブラック飲むのって、俺にとつてはちょっと意外だ。素直に尊敬した。

なんか、大人っていう感じだ。

「あ、うん。お金はいいよ、転校祝いにあげる！」

「ほんと？ えーと……渡辺くん？ だつたよね？ 転校祝い。あ  
りがたくいただくな」

微笑んで、缶のプルタブに白い指が触れる。今、俺は思った。

プルタブになりたい。

そして、黒い缶が……チヨリーピンクの唇に……吸い寄せられ。

触れる。

直後、黒い液体が俺のコーヒーが……彼女のの中に進入する（この表現工口いな）。

苦々に顔をしかめるでもなく、おいしそうに飲み干す相羽さんの顔には、幸せといつ字が顔に書いてあるといったような満面の笑み。天使だ。

今、俺は思った。

「コーヒーになりたい。

「転校祝い」がやつれ。また教室でね、渡辺くん」

そつと「△△△箱に缶を捨てた相羽さんは、まるでテレビのコモロノの消音ボタンを押したかのように静かに音も無く去つていった。まるで、風のよつ」。

俺はそつと願つた。120円の転校祝いが、恋の始まりになりますよつこと。

## 田 標を持つことは、ステキな男性への一歩？

突如俺の願いを遮るように稻田がやってきて、田の前の「ゴミ箱」に  
おもむろに右手を突っ込んで黒い缶を取り出した。

「ふひひひ！ ナベ、悪いがこいつは俺がもうう。相羽の飲んだコ  
ーヒー……」

稻田は気持ち悪い笑みを浮かべながら、学食を去つていった。缶  
をどうする気だ。

ちゃんと言つてやるべきだつたか？ 学食の自販機の横には「ゴミ  
箱」が一つある。うち片方には先ほど相羽さんが捨てた缶が入つてお  
り、もう片方には柔道部3年生の佐藤先輩……身長1・9メートル、  
体重0・12トン。マウンテンゴリラ佐藤の異名を持つ、彼が飲み  
干した缶が入つていたのだが……どんな味だったのか、後で稻田に  
聞いてみよう。あいつには相応しい末路だ。

学食から教室へと帰還すると、自分の席に着くとしたら生徒の  
山ができていて、それは不可能となつた。

相羽さんを中心とした人の渦は、楽しそうな笑い声を教室に振り  
まき、それに参加しなかつた者は教室の片隅で暗く寂しく一人の時  
間を過ごしている。

邪魔だな……こいつら。だいたい、相羽さんにそんな付きまとつ  
たら迷惑だろう。彼女の気持ちも考えてあげるべきだ。

溜め息を付いて手近の空いてる席に腰を落ち着かせ、会話の内容

に耳を傾ける。

「相羽さんって彼氏とかいるの？」

早くもプライベートに突っ込んでいる奴がいるな。いいぞ。もつと聞きます。

「いなこよ

相羽さんは、はにかんだような声で、恥ずかしそうに答える。ついでに誰か好きな異性のタイプも聞か出してくれるとありがたい。

「じゃあじやあー、どんな男の子がタイプ？」

「マジメな人かなあ。しっかりと田標を持つていて、それを最後まで成し遂げる強い意志を持つた人」

むむ。マジメというのは、俺にピッタリと当たる。田標を成し遂げる強い意志……か。

とりあえず、投げっぱなしにしていたジグソーパズルを帰つたら完成させよう。

と、そんな事を考えていたら昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴つて、人の渦はバラバラと散つていった。

その後、5時間目と6時間目を終え、今日一日の授業が全て終了する。

ホームルームが終わると、相羽さんは女子数名に連行され、教室

から出て行つた。カラオケに行くらしい。

俺も誘われたが、今日は用事があるので泣く泣く見送つた。相羽さんの歌……聴きたかった。

何を歌うだろうか？ もしかして、アニソン？ アニソンとか歌わせたら、萌えるな。ああ、行きたい。けど、行けない。

俺は、教室から去つていつた彼女の後姿の残像を目に焼き付けたまま、我が家へと帰宅した。

\*\*\*\*\*

晩御飯を食べて自室に戻ると、オレは机の上のノートPCの電源を入れ、立ち上げる。

食後のコーヒーを机の端に置いて、カオス・クロニクルの世界へ。

IDとパスワードを打ち込み、キャラクター選択画面へと移動する。そこには一人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

オレは、金髪の少年の隣に立つて青い髪の少年、エルトを選択する。

ローディング画面が表示され、待つている間にコーヒーを一口する。舌の上に広がる香ばしさと、ほんのりとした苦味が脳を刺激し、意識を覚醒させる。

これがなければ始まらない。

やがて、ディスプレイには//ロンの村の景色が映し出され、田の前にはフェイブの少女が立ち尽くしていた。

「エルくん、遅い……」

「よう、パン。つづりと待つてたのか？」

「うん……」

よほどヒマなんだな、こいつ。勉強とか大丈夫なんだろうか？  
いや、案外これでいて頭はかなりよかつたりするかもしない。

「さて、今日は……そうだな。お前、パーティーのリーダーになつてメンバーを集めてみ？」

「ええ@@」

「ええ。じゃないよ。一番早いのは、同じレベルの仲間を集める」とだ。それを繰り返している内に、仲が良くなつて友達になる。やうなると、その仲間と固定メンバーで狩りにいくこともあるだろ？

「でも、パン。知らない人とお話するのは苦手。。。」

「じゃあいい機会だ。苦手を克服しろ。お前には明確な目標がない。いつまでもオレにぶらさがつてはいるだけじゃダメだ。独り立ちできるだけの知識とスキルを身に付ける。オレはお前の保護者じゃないんだからな」

ちょっとキツイ言い方になつたかもしないが、これはブンの為である。ブンの職業はナイトだ。ナイトはソロ向きの職業じゃない。今のレベル帯ならばソロまだなんとかできるが、高レベルの狩り場になればなるほどソロは困難になる。

だから早めにパーティーに慣れる必要がある。

「いいが、ブン。まずメニューを開いて、そこからパーティー マッチを選ぶんだ。そしたら、パーティー作成ボタンを押して、コメントに『狩り友募集。一緒に炎の祭壇で狩りしましよう♪』と入力しろ」

「わ@@ ちょっと待つてvvv」

トロ臭い奴だな。再びローリーを口に含み、ブンの作業が終わるのを待つ。パーティーマッチ（以下マッチ）を作つてもすぐに他のプレイヤーが来るわけでもない。

少し、このカオス・クロニクルの世界観と職業についてお勉強させてやらないとな。

## 猫耳魔法少女は ？

カオス・クロニクルは、6つの種族と8つの職業の組み合わせでキャラの能力が変わる。

まずは種族。

ヒューマン。平均的な能力値を持つ初心者向けの種族で、どの職業とも相性がいい。

エルフ。攻撃力と魔力が低く打たれ弱いが、回避率や攻撃速度、詠唱速度が高いので、アーチャーや、ヒーラーと相性がいい。

ダークエルフ。攻撃力と魔力はヒューマンを少し上まる程度だが、クリティカル率とクリティカル時の攻撃力が非常に高い。その分エネルギーもさらに打たれ弱い。ローテ、ウイザードと相性がいい。

オーフ。全種族中最高のHPを誇り、一撃一撃の攻撃力が高い。しかし、速度に関しては全種族中最悪で、特に後衛の魔法系職業とは相性が悪い。とりわけ、ウォーリアが一番相性がいいが、ナイトという選択もある。

ドワーフ。能力はヒューマンを劣化させた感じになる。どの職業もこなせるといえば、こなせるが反面特にどの職業と相性がいいと いうわけでもない。しかし、ドワーフは唯一生産系のスキルを使えるという魅力がある。

フェイブ。低いHP。低い防御力。それを補つて有り余る攻撃力、魔力、MP、速度、回避率。基本コンセプトは『殺られる前に殺れ』

、『攻撃は最大の防御』と言つたところか。実装当初はここまで極端なパラメーターではなかつたのだが、ナナメ上行くアップデートのおかげでネタと化した。

次に職業。

ウォーリア。剣、槍、斧・鈍器、デュアルソードを使いこなす近接戦闘のエキスパート。スキルはジャンプして目標に飛び掛る『メガクラッシュ』や、大ダメージを与える『クリティカルブレード』など、多彩で派手なエフェクトのスキルが充実している。

ナイト。剣と盾を装備する。パーティーの壁。ヘイトスキルを用して自身にターゲットを固定させたり、スキル『ファイナルプロテクション』で防御力を一時的に底上げすることができる。

ローグ。デュアルダガーを装備する。暗殺者。一撃で敵を仕留める事も可能な『デュアルスタッフ』に、5秒間姿を消す『サイレントステップ』で敵を不意打ちできる。

アーチャー。弓を装備する。遠距離からちくちくと攻撃でき、視点モードを切り替える事で、ピンポイントで相手の部位を攻撃できる『スナイプ』が使える。

ウェザード。攻撃魔法を使いこなす。魔法書を装備する。地水火風の属性攻撃魔法を使いこなせるが、覚える魔法は種族によって一部異なる。例えると、ヒューマンが覚えるブレイズアローはフェイブは覚えず、代わりにダークアローを覚える。

ヒーラー。回復魔法の使い手。杖を装備。回復魔法全般と、一部だが強化魔法も覚える。このヒーラーの技量によってパーティーの

生存率が大きく変動する。

サマナー。召喚獣を使役する。装備は杖・魔法書。使役できる召喚獣は、狩り場に出現するMOBである。自分のレベル+5までのMOBと召喚契約を結べるが、最大3匹までしか契約できない。使役できる召喚獣は原則一匹のみである。主人のレベルに合わせ召喚獣もレベルが上がるので、こだわりのあるプレイヤーは、「ゴブリンを最大レベルまで育て、それを最高狩り場で使役する」という。

エンチャンター。強化魔法（バフ）を使いこなす。装備は特に何の縛りもなく、全ての武器を装備できる。が、攻撃スキルもないし、攻撃魔法もない。しかし、自分を含めたパーティメンバーの能力を大幅に強化する強化魔法（バフ）を使えるので、ある程度のソロは可能である。ナイト、ヒーラーに続いてパーティ狩りでは必須の職業だ。

「……こんなもんかな。わかつたが、ブン？」

返事がない。

「ブン」

しかし、返事はない。

「ああああああ、ごめん。寝てた……」

「寝落ちひとつ、やつてくれるな

「だつて、ヒルくんの説明長いんだもん……」

「お前はアホか。これくらい頭に入れておけ。基本だ。できる前衛つてのは後衛の経験もあるし、できる後衛つてのは前衛の経験があるもんだ。互いが互いを思いやれば、それは自然に理想のパーティーの動きになる。だから、公式に載つてる全種族、全スキルのデータを頭に入れておけ」

「そんなの無理だよ～；；あ、それならエルくんもヒーラー以外の職で前衛やつたことがあるの？？」

一瞬答えるべきか躊躇した。しかし、自分で吐いた言葉を自分で踏み潰したくない。ここで『やつたことがない』なんて言つたら、できる後衛じやないと自分で言つてしまつよつたモノだ。ブンにナメられるわけにはいかない。

「まあ、な」

「おお～@@～」

それ以上答えるつもりは無いので、話題を変えよつとした時、いいタイミングでヤマモトがログインしてきた。

オレとブンの真後ろにヤマモトの巨体がうつすらとフードインして、カオス・クロニクルの世界に形作られていく。

「ソロモンよ、私は帰ってきたーー！」

何のセリフだか解らないが、またもシャウトでHコア一帯にヤマモトの声が響く。

「ヤマモトさん」んくく

「ぬお。 プンちゃん、 今宵も一段とハアハア」

「ハアハア^ q^」

「お前らヤメ口」

プンがヤマモトに連れられ、ハアハア言い出したので止める。それでも、予想よりも早くヤマモトがログインしてくれたので助かった。

「いや~とりあえず、仕事放り出して帰ってきた！ 上司が何か言つてけど無視してやつたw」

……ダメな大人がここにいる。

「そんなことしてたらクビ切られるぞ。オレはよく解らないけど、再就職つて難しいんだろ？ てか、それつて大人としてどうなのよ？」

「てへ、中尉にほめられちつた（／＼／＼）」

何を言つてもダメなようだ。それ以上何も言わないことにして、プンの開いたパーティー・マッチに再び目をやる。

「おい、 プン。 パーティー希望者が来たみたいだ。 えつと、 すペリ おる……だな。 このすペリおるつて奴を招待しない」

マッチには一人のプレイヤーが顔を出していた。名前はすペリある。職業はドワーフエンチャンター。エンチャントーか。都合がい

いな。

ブンが四苦八苦しながらすぺりおるを招待する。事前にオレとヤマモトもパーテイーに入つていたので、4人分のHPバーが画面上に表示される。

「アーティスト」

すぱりおるの発言。と、それと同時オレ達の前方にドワーフの少女がことこと歩いてきた。

このカオス・クロニクルにおいて、ドワーフ＝ヒゲもじゅうじゅう  
という想像は間違いである。

ドワーフは男女とも、小学校高学年くらいの幼い少年少女である。こちらもオークとは違う意味で人気が高い。特に、ドワーフ女は、田の前に現れたドワーフの少女は、頭に猫耳を装着し、ピンク色のローブ（これまた丈が短い）、杖を装備していて魔法少女然としていた。

「ぬお。す、すペりおるたん、ハアハア」

案の定、ヤマモトのハアハアがすべり落ちて炸裂する。

プリンは、ドワーフ女を見るのが初めてなのか、近寄つて抱きつくソーシャルをする。ちなみに抱きつくソーシャルは、相手側の了解を得られないとできない。

「レベル28のドワーフエンチャントーだぜい。縁のおひさご、ム  
サイから近寄るな。ねーちゃんエエ尻しどるのう」

「ぬを。まさか、すぺつおるたんつて……」

「ああ、俺、ネカマだから」

ドワーフ女の8割は中身が男だとこつ噂があった。噂は真実らし  
い。

## こいつがあの田の田の田

すべりおるの中の人は男。まあ、ヘンに女言葉を使われるよりもオープソな方が、さっぱりしていいかもしない。

ドwarf女、通称ドワ娘は一部に熱烈な人気があると先ほど説明したが、ドwarf男、通称ドワ坊も人気がある。これもまた、一部に。

そのドワ娘とドワ坊だけで構成されたギルド『幼稚園』は、ドワ信者の巣窟である。待て、そういえば……幼稚園のギルドマスターの名前はスペリオルだつたはず。

こいつ……スペリオルのセカンドか？

ちなみにセカンドは、一番目に作成したキャラクターという意味で、サブキャラとも言われる。

すべりおるの装備を見れば、一目でこいつが上級プレイヤーのセカンドキャラだという事が解る。

今のレベル帯で装備できる最高グレードの装備品に、アクセサリーの猫耳。猫耳はけつこう高価なアイテムであるし、そもそも初心者プレイヤーはそんな所に金を使う余裕は無い。

「もしかしてあんた、スペリオルか？」

オレは思い切つて聞いてみた。

「あいや？ なーんで俺の事知つてんの？ メインで会つたつけ？」

「いや、名前を見てなんとなく……」

本人だつたらしい。これは助かる。スペリオルはこのサーバーでも屈指のウォーリアである。彼女……いや、彼か。彼のプレイスキルがあれば、オレのアシストもそんなに必要ではないかもしれない。

「んーー？ プンってばかなりキャラメイクいじくつたなあ？ 珍しいぞ、それ」

すべりおるがプンの周りをちょろちょろと動き回る。そして、プンを凝視したまま呟いた。

「うん^ ^ 5時間かけて」の子を産んだのです^ ^ ^

カオス・クロニクルのキャラクターメイキングは自由度が高い。鼻の高さ、位置、唇の大きさ、耳の大きさ、輪郭などなど……いじりだしたらキリがない。

だから、サンプルがいくつか用意されているのだが、キャラに愛着がある奴は最初ここで大いに悩むらしい。それにしても、5時間つて……オレなんか、サンプルAの目つきと髪色いじつただけだぞ。

「ぬを。 そうだったのか、プンちゃんハアハアの秘密はそこに！」

普通、5時間かける奴はいないと思つが……やはりプンは変わっている。

「それじゃ、早速『炎の祭壇』に向うか。おっと、その前にひょ

と飲み物入れてくるよ」

「こわいへへ」

机の端に置いてあつたマグカップを手に取り、リビングへと向つ。リビングのドアからは光がもれ出でていて、テレビの賑やかな音が暗い廊下に響き渡つていた。

「あら、またコーヒー？ 成長期なんだから、あんまり飲んだら体に毒よ？」

ドアを開けると、母親がテーブルで家計簿を付けていた。マグカップを右手に持つオレの姿を見て、飲みすぎないよう注意をかけてくる。

「別に……あれ、お父さんは？」

「残業よ。あんたと潤の学費を稼がなくなくちやならないんだから、頑張つてもらつてるの。お母さんも来週からパートに行かないと……あんたも来年受験だから、予備校か家庭教師を付けないといけないわね。ああ、出費がかさむわ。宝くじでも当たらないかしらねー」

母親の声を背に、戸棚からインスタントコーヒーの瓶を取り出し、マグカップへとそれを入れると、その上にお湯を注ぐ。白い蒸気が立ち上りそれが鼻腔を突きぬけ、コーヒーの香りが脳を刺激する。

「学校はつましくつてるの？」

「別に……」

「お母さん、心配なのよ? 潤はたくさんお友達を連れてくるけど、あんたはいつも家でゲームばっかり。成績は下がったりしてないから、やめろとは言わないけどね。友達をつくる事も大切なのよ? 解ってるの? まつ」

母親の話が終わる前にリビングのドアを閉めた。会話の中に出てきた潤とこつのは一つ年下の弟だ。

小さい頃からそつだつた。父親の仕事の都合で転校を繰り返し、長い付き合いの友達が出来たことは無い。弟は正反対で、すぐに誰とでも仲良くなれる性分らしい。

確かに、現実には……リアルには友達が少ないけど、ネットには……どんなに距離が離れていても、場所が変わらうとも、何でも話せる仲のいい友達がたくさん『いた』。

そうだ。1年前までは……こんな風に打算で物を考えるズルい人間じやなかつた気がする。パンのような初心者とたくさん狩りに出来てすぐに仲良くなつて……。

でも……。

また作れるだろ? 新しい場所で……新しい仲間を。

脱ぎ散らかした制服と、今日の授業で使つた教科書。ゴミ箱をひっくり返したような床。そんな地獄絵図のよつたな部屋の中で、そこだけは輝いていた。

机のイスを引いて、腰を落ち着かせると淹れ立てのコーヒーを口に含み、カオス・クロニクルの世界へと戻る。

「ただいま」

「エルくんおかーへへ」

「ぬを。中尉、おかえり」

「おかえりい」

待つてくれた。昨日今日出会ったばかりの3人は、確かにそこについて、オレの事を待つていた。

「行こう、炎の祭壇へ」

エルトは歩き出す。その背中を追うように3人が付いてくる。いつかまた……1年前のようにオレはここにつらと仲良くなれるのだろうか？

## 狩り場はみんなのもの

村のテレポーターまで歩いて、そこから一気に炎の祭壇へとテレポートする。

炎の祭壇は30代前半の狩り場だ。けっこう格上のMOBがうろちょろしているが、今日はエンチャンターもいるし、HP管理はオレが一手に引き受けるので、全滅することは無いだろう。

ちなみに、MOBと9レベル以上の差があるので、オレには経験値が入らない。だから、あえてそれを利用してオレもパーティに入っている。こうすれば、オレが経験値をムダに吸つてしまふこともないし、パーティーメンバー全体に効果が及ぶ『グループヒールライト』が使える。逐一メンバーのコンディションが確認できるといつのも大きな利点である。

めらめらと燃え盛る炎の沼。辺り一体は炎以外に何もなく、火属性のMOBがうじゅうじゅうと沸いている。中央の祭壇……単なる岩山にはじごをかけた程度の物だが、そこにエリアボス『フレイムガイスト』が待ち構えている。

このメンツでは心許ないので討伐はしない。

カオス・クロニクルは最大で6人までパーティを組める。基本的には、ナイト、ヒーラー、エンchanター+それ以外の職3人という構成がスタンダードだ。討伐するにしても、もう一人くらい欲しい。

それに、種族ボーナスも考えると、エルフとダークエルフがいい

ば文句がないのだが……。

種族ボーナスについて説明すると、各種族ごとにパー・ティーを組んだとき、メンバーに強化魔法が適用されるのだ。種族それぞれに固有のボーナスがあるのだが、6種族それぞれがバラバラに参加していれば6種のボーナスが得られるわけだ。

とはいって、一人でもブンの狩り友候補が来てくれたのでこれ以上の文句は言えないか。

「さて……ブンのためにも少しパー・ティーらしく狩りをしてみるかな。ヤマモトはT」。ブンはF.A.。オレは状況に応じてスリープとヒールを。すぺりおるは臨機応変に攻撃

「ぬを。Tしか、了解！」

「あいよー」

「@@?」

ヤマモトとすぺりおるはすぐさま理解してくれたが、ブンだけはまったくわかりませんオーラを放出していた。

「ブン、Tっていうのはターゲットリーダー。それぞれがバラバラにMOBを攻撃したら効率が悪いだろ？だから誰のターゲットに合わせるかを決めておくんだ」

Tは非常に重要な役柄もある。優先して倒すべきMOBを選定するのもそうだが、ナイトのヘイトからもれたMOBや、予期せぬMOBとのリンク時に適切な判断が必要になる。

もう一つの意味として、トークリーダーといつのもあつたりするのだが……」これもまた、重要だ。パーティー内のチャットを盛り上げ狩りを退屈にしない。」これは誰にでもできることではないが。

「FAは、ファーストアタック。要するにMOBを最初に攻撃するプレイヤーだな。」これは性質上ナイトの役割だ。MOBへの攻撃を優先して繰り出し、ヘイトスキルを使って敵対心をあおる。そうすればMOBの攻撃はお前に集中する……大丈夫。お前のHPは常にオレが見てるし、危ないと思つたら即リターンする。損な役割かもしれないけど、これができればお前は立派なナイトだよ

「うーん、わかんないよお……」

「せうだな……簡単に言えば、ヤマモトのターゲットしているMOBにヘイトをかける。それを倒したらまたヤマモトのターゲットしたMOBにヘイト。その繰り返しになるな」

「わかった! ヤマモトに会わせればいいんだね! それならおバカなパンでもできちゃう! うわーうわー」

「やうか。それじゃ早速始めよ!」

「……」

「なんだ、パン?」

「パンはおバカじゃないよ! つていうフォロー待ってるの! どうして誰もそう言つてくれないの!」

しばりべ眞沈黙して。

「ブンはおバカじゃないよへへ これで、いいのか？」

素つ氣無くそつタイピングしてみた。

「心がこもってないよ@\_@」

「お前はアホか。初心者なんて皆最初は解らない事だらけさ。やつてる内になれりゃいいんだ。オレだつて最初はそつだつたんだし、気にするな」

「やうそー ぼくちんなんか、最初ダークエルフのおねーちゃんのお尻ばつかり見てたら、今度はエルフのおにやのこの生足に目が行つて、ドワ娘のツインテールでうつとりしてたら、いつの間にかパーティー追い出されてたよ！ ブンちゃんはハアハア指數が半端ないから、いっぱい失敗しても大丈夫！ 初心者さんにはよくあることだよん！」

「ヤマモト」

「ぬを。中尉、何か？」

「お前がミスつたら即追放する」

「ひどすー」

ひどくないだろ？。ここまで口口バカいとは、想像できなかつたが。……男キャラでよかつた。そんな風に見られてたらと思つてゾつとする。

「じゃあ、パンも注意しなや。エハーハンの横顔につけとつこへぬ暇はないわ。」

男キャラでも、見られる」とは見られるらしい……。

「……そろそろ始めねえ？」俺もう、パンのスカートの中のそくの飽きたよ

のぞくなよ。

とりあえず狩り場での諸注意を話し終えた後、オレ達はさっそく狩りをすることになった。狩りに入る前にすぺりおるが習得しているバフをかけて、戦闘力を上げスタート。

ヤマモトがファイアスピリットといづれMOBにターゲットし、  
ブンがそれをヘイトする。ブンめがけて襲い掛かるMOBをヤマモト  
が攻撃し、すペリおるがその補助をする。

「ぬを。やっぱバフがあるとぜんぜん違つて！ テレinzザム発動したみたいだおー。キラ・ヤマモト、田標を駆逐するー。」

「アマナム」

「ヤマモトにはヒールなしだな」

「>>>二十九日、さくらんば」

「ぬお。」これなんてイジメ（。。）」

順調にMOBを倒していく。初めはミスを重ねていたプンだったが、次第に慣れていき、今では攻撃しながらチャットできるくらい余裕が生まれていた。いい感じだ。

プンは成長している。チャットの速さもだが、順調にレベルも上がっているし、自分の立ち位置をちゃんと理解できるようになった。昨日今日でここまで成長しているのを見ると、付き合つた甲斐もあるというものだ。

……やればできる子なんだな。

とはいって、プンはフェイブナイトだ。気を抜けば一瞬で瀕死状態になってしまふので非常にヒヤヒヤさせられる。常にHPゲージが4分の3以上ある状態をキープしておかなくてはならない。

狩り始めて、20分ほどした時……それは唐突に起つた。

プンがヤマモトのターゲットしたMOBにヘイトをかける。MOBがこちらにやってきて、いきなり倒れた。まだ、攻撃していないはずなのに。

「さつや？」

「ぬを。プンちゃん攻撃した？？

「ハハん、してないよー？」

倒れたMOBをよく見ると、矢が3本刺さっている。カメラを回して周囲を見渡すと、炎の向こう側に3つの人影があつた。

「横殴り……か？」

オレが呟いてすぐ、3つの人影がこちらにやってくる。それは、3人のエルフの女性だった。3人とも同じ装備、同じ髪型、同じ顔である。ただし、髪色だけは違っている。

「げえ。肉屋だ。うつぜ。うーーー、あいつのナワバリだつたんかあ」

「すぺりおむちやん、お肉屋さんなんてビリヒモないよ@.@.^.」

「パン。あいつらの名前見てみろ」

「えつと。豚肉500㌘ 牛肉500㌘ 鶏肉500㌘……？」

『肉屋』はエルフアーチャー3人の事を指している。豚肉500㌘ 牛肉500㌘ 鶏肉500㌘という3キャラではあるが、あれを操作しているのはたった一人の人間なのだ。

3PC……3つのPCでマクロを駆使して同時に3キャラクターを操作する風変わりなプレイヤーで、キャラの名前から『肉屋』と呼ばれるようになつた。

しかも、この肉屋。狩りのマナーがすこぶる悪い。一旦狩り場に引きこもると、5時間はずっと独占していて他のプレイヤーが近づくことのない、周囲のMOBを全て乱獲してまで独占しようと/orする。一般的プレイヤーからは嫌われている存在だ。その肉屋がここにいる……ということは、この狩り場もあいつに独占されてしまうだろう。

「いい、使つてます」

真ん中の金髪のエルフ……おやりく、これがメインとしているキヤラなのだろう、豚肉500gがそういう言いやこなや、オレに向つて矢を放つた。

矢がものすごい勢いでオレに迫り　命中する。

しかし、矢がオレをすり抜けて、真後ろに出現したMOBに命中した。

「邪魔」

「ぬを。いくら金髪エルフぺつたんこ生足ステキつ子でも許せん。お前にはハアハアせんぞ！」

「ヤマモト、後ろにすつこんでバナナでも食つてろ。豚肉500gさん。ここはオレ達が20分以上前から狩りをしていたんですね。狩場はみんなの物でしょう？　みんなで譲りあって」

オレのセリフが終わるまでに、周囲はMOBの死体でいっぱいになつていた。なおも3人のエルフは弓を引き、矢を放つ。

「だから？」

「こいつは人の話を聞くつもりなどないらしい。

……どつするか。

## リアルのオレヒルト

「場所を変えよう。もう少し奥にいけば、弓矢に耐性のあるMOBがいたはずだ。いくら肉屋でもそれは狙わないだろう。せっかくここに来たんだ、あいつに何を言われようとオレ達はここで狩る。嫌な思いをした奴もいるかもしれないけど、我慢してくれ……PVPなんてこと、したくはないし」

「いや～しようがないんじゃねえ？ 肉屋は何を言つてもムダだから絶対ここにどかねーよ。それより、むしろ弓矢耐性のMOBを二つの田の前で狩りまくつてやるーぜ。その方が楽しいわ」

すべりおぬはねつ言つて、一足先に炎の奥へと消えて行つた。

「ぼくちんは、中尉の言つ事に従いますよ。確かにあの人はちょっとムカつくけど、生足がステキだからこれ以上はなーんも言えません。は！？ あの危なつかしい走り方のすべりおるたん……ハアハア。ぬを。けれどすべりおるたん、中身男……うづ。ぼくちんはどうすれば……」

ヤマモトは結局ハアハア言いながらすべりおるの後を追つていった。何でもいいのかあいつは。

「ブン。奥に行こう。こよつけようと強いけど、邪魔されるよりマシだ」

「何で」

「ん？」

「何でみんな仲良く一緒に狩れないのかな～～～ みんなで狩ったほうが絶対楽しいのに。。」

「そうだな。でも、それぞれ事情があるんだよ。一人で狩りたい奴だっているし、時間がないから他人に付き合つてる暇もないのかもしない」

オレも他人の事は言えないが……。

ブンはまだ納得していない様子だが、オレが歩き出すとブンも離れまいとすぐさま後を追つてきた。

場所を変えて、再度すぺりおるのバフを受けて狩りを始める。M O Bの攻撃が少し激しくなつたが、狩れないほどのことじゃない。

遠くから矢を放つ音がひつきりなしに聞こえてくるので、肉屋の乱獲は健在のようだ。だが、田論見通りこのあたりは『矢が通じないM O B』いるので、近くには寄つてこない。

正直、『邪魔』と言われたときにはカチンと来だが、熱くならなくてよかつたと思う。今のオレは一人じゃない。不本意ながら……ブンのお世話係りもある。

そのブンと狩り友となってくれるかもしれない、すぺりおるの前で問題を起こすのは得策じやない。すぺりおる本人も憤慨していたが、彼はあれでいてギルドのマスターだ。

後々に問題になるような事を起こしてはならない。ギルドマスターはギルドの顔だから、その下にいるギルメンにまで迷惑をかけて

しめり込むとなる。

ギルドマスターはギルメンの事を第一に考えなければいけないんだ。ギルメンは仲間であつて家族同然なんだから……。

だから、これはパンを思つての行動ではない。すべつあるとパンの関係を円滑に深めてもらうための措置だ。

だから、これはパンを思つての行動ではない。すべつあるとパンの関係を円滑に深めてもらうための措置だ。

それは回りまわつてオレのためである。——こつがレベル40になればそれまでだ。

「ねえ。パンちゃんベルアップおめでええー。いくつになつたの?」

「ありがとー！ 28になっちゃった！ えへ▽▽▽▽▽」

あと12レベル……意外とその日は近いのかかもしれない。そうなれば、目的のアイテムを得て、フンとお別れだ。そのまま順調に育てば、あるいは桜並みに化けるかもしれないな。

「お前はアホか。なんでよりによつてエリアボスにヘイトした！少し見直したオレの感傷に浸つた時間を返せ！」

前言撤回だ。こいつが桜並みに化けるなんてありえない。あいつは冷静で努力家なんだ。こんなに天然ボケてない。

「全員オレの周りに集まれ！ リターンを発動させる」

「ぬを。フレイムガイストたんがハアハア言つてるおー。『めやーす  
！一撃でぼくちん、死んだ（（。。。。）） ぱねえつすー！』

ヤマモトの尊い犠牲のお陰でオレ達は無事にリターンで『ロンドンに帰還する』ことができた。

「……」ヤマトが尋ねた。

村の広場でヤマモトが大の字になつて倒れている。死体ごと村中に転送されたようだ。それを見つけたブンがすぐさまヤマモトに駆けつけた。

「ねを。パンちゃん、もつといつちへカモンです。そーそー。あ、いきすゞ……半歩左へ  
もつねよつと右。あ、いきすゞ……半歩左へ」

「君のくん^ ^？」

「ばっちぐー！ このアングル。マジで神です！ さっそくスクリーンショットにとって寝る前にハアハアを！」

すぐここにリザレクションをかけてヤマモトを蘇生させた。

「ぬを。まだ保存してないの?」  
「中尉、男のロマンを向とするのですか?」

# 「黙れド変態」

「そんな事言って。中尉だつてほんとは興味あるんでしょお？  
男子にとつて、女子のスカートの下はまさに聖域！ シャングリラ

！　「一トピア！　ア・バオア・クー！」

「オレ、女に興味は無いから」

「な、なんすとー？　まさか、中尉は……」

「ああ。オレ、リアル17歳の女子高生なんだ」

「ええええええええええええええー！？」

「つて言つたら面白こだろいっ！」

「なーんだ。びつくりした冗談だつたのかあ。一瞬ほんとにそつか  
と思つたで」わすよ。このキャラ・ヤマモト修行が足りませんでした  
……」

「オレだつて冗談くらこは言つた。それより……ブン！　ヒリアボ  
スに間違つてヘイトとかお前は面白い奴だよ。一緒にいてスリリン  
グで飽きないわ」

「えへへへへ～でしょでしょ～～～」

「ほめてねーよー！」

「あ。エルトヨーい。俺、このへんで抜けるわ。明日早いし。そろ  
そろ寝ないと、嫁に殺される」

すべりおるがオレ達の会話に割つて入つてくる。……嫁？

「ぬを。すべりおるがオレ達の会話に割つて入つてくる。どうせあれでし

「…ディスプレイの中の嫁でそ？ うなみにほくひさん、姉と妹と娘のお母さんも極秘フォルダにいますね」

「こや。俺ウソつかねーし」

「ヤマモト。前、マジきもいな

「ヤマモト、見損なこました」

「な、なんですかこの空氣は。ぼくちんは中尉と違つて健全な男の子なの。」

「ヒルくんはかっこよくて優しくからいいナビ、ヤマモトはダメなの。」

「ださうだ、ださうだ。今日までの邊で終わりこな。お前もさつきとログアウトして、極秘フォルダ開いてハアハアしとナ

「くそーー。中尉が泣いて謝つて土下座してフォルダの中身を見せてくれだせこと頼んできたら、見せてやるからなーー！」

「ボケーー！」

ヤマモトは捨てセリフを残して去つていった。ていうか、始めから見せる気があるんじやないか。別に見たくないけど。

「ほんじゅー落ちるわな。つと。チビがくずり出した。ああ、それとー。今日、楽しかったぜ！ なんか、始めたころを思い出したよ。狩りつてこんな風に楽しかったんだな。今じゃレベル上げも単なる作業だ。お前らと一緒にあつたよ。また今度機会があればどつかいーぜー。じゅあなー」

すぺりおるはソーシャルでかわいらしく一回転すると、フードアウトして消えて行つた。あとに残されたのはオレとブンだけだ。

「エルくん、ありがと^ ^」

「何が?」

「ブン、また一人お友達ができたし、知らない狩り場に連れて行つてもらえた。それに、パーティーでの狩り方もお勉強になつたよー。」

「そうか。それはよかつた」

「ブンは妄想しちゃうのです、リアルのエルくんも、きつとクールそこに見えて熱くて優しい男の子なんじゃないかつて^ ^」

「勝手に妄想するな」

「背は190CM以上あつて、アイドルみたいにかっこいい顔で、声はちよつと低めで、特技はブラジリアン柔術@@ー。」

「なんだそれは」

なんでオレの特技がブラジリアン柔術なのがも突つ込みたい。

「いつかね。リアルでエルくんに会えるといいな^ ^」

「オフ会がしたいのか?」

「うん@@ やまちゃんも、すぺりおるちゃんも呼んでみんなで

お話するのー。」

「オレはバス。そういうのに興味ないから」

リアルを持ち出すな。ゲームはゲームだ。ここでのオレはエルトであって、リアルのオレは関係ない。

「うーん、そつか……じゃあしようがないね。それじゃブンも落ちるね！宿題まだなんだつた@○@ 数学は苦手ナンデス……」

「数学はオレも苦手だな。英語とか古文なら教えてあげれるかもだけど」

「エルくんも文系かー。でもブンは英語まったく苦手ですー。昔の日本の偉い人に、ブンが生まれまで鎖国しどけ@○@ー。と言つてやりたいくらーなの……」

「無茶を言つな」

「あは。それじゃ、ブンも落ちるねーお休み、エルくんண�

「ああ、お休み」

田の前でブンがログアウトしたのを確認し、オレもまたログアウトして田の電源を切った。

## ボーナスチャンス到来！？

「オフ会……ね」

自室の学習机のイスに体重を預け、電源が切れたPCを見つめる。真っ暗な液晶画面には何も映し出されていない。それは、リアルのオレの瞳も同じ。

1年前のあれ以来、他人に対してもたく興味がなくなってしまつた。けれど、無愛想な顔をして他人を避けていたら、周囲に敵を作りかねない。

だから、作り笑いをして、浅く付き合つて本心は決して見せないようにしている。深い所まで踏み込まれたくない。母親が言ったような、友達を家に連れてくるなんて事は未来永劫ないだろう。

それに、こんな部屋見たらみんなドン引きするだろうし。

ふと、パンの言葉を思い出す。

『リアルでエルくんに会えるといいなへへ』

ゲームの中のオレとリアルのオレでは違います。パンはきっと幻滅するだろうな。だから、会わないほうがいい。

力オス・クロニクルの世界では、容姿をいくらでも美しく設定することが可能だ。だから、そこにリアルの自分の容姿の美醜は関係ない。

ありのままのそいつの姿が……心が浮き彫りになる。文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来るんだ。

一体オレの何がいいと言つんだらうか？ オレは偽善者なんだぞ、ブン。

窓になつたマグカップを片手に、部屋のドアを開けると就寝前のコーヒーを飲むためリビングへと降りていった。

\*\*\*\*\*

今日も眠い。俺は必死になつてあぐびをかみ殺しながら、駅の改札をすり抜け学校へと向つていた。

俺の周りには、詰襟の学生服に身を包んだ少年や、黒い生地に白い刺繡のセーラー服に身を包んだ同じ年くらいの少女達。

俺の通つている高校の生徒達だ。女子の制服はシンプルだが、胸の白いリボンが大きなチャームポイントで、近所の大きなお友達の間でも人気のある一品だ。シンプルなところがいいらしい。

いや、これは稻田から仕入れた情報だが。

駅から高校までは歩いて20分ほどもかかる。その行程も半分以上を終え、学校を視界の端に捉えた時、石鹼のいい香りがした。

俺には解る。彼女だ。

「相羽さん！ おはよう」

振り返つて昨日の夜一生懸命練習した、対相羽 真理奈専用挨拶を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせた。 はず。

「あ、ちよ、待ってよ。」

無視されてしまつた。

さては、照れているのか相羽 真理奈！？ ふはは。 そうだろう  
そうだろう。 3時間かけて編み出した俺の最終奥義である。これが  
直撃して無事な女子はいないはず！

「あの……相羽さん？？」

歩く速度が早い。もしや、予想以上の破壊力だったか？

俺も速度を上げて彼女の横に並んで歩く。振り返ってくれた。

「誰……？」

۲۷۷

「私は急いでますので」

「ええ？ ちよつと待つて、俺だよ、同じクラスで隣の席の、渡辺

だよ！」

「……ああ！ 渡辺くん。ごめんね、私。寝ぼけてたみたい

普通に俺の事を忘れていたみたいだ。軽くショックである。けれど、その爽やかな笑顔で俺の心は一瞬で満たされる。

真新しいセーラー服に身を包んだ彼女の姿は、さながら女神のようだ。太陽の光を受け、神々しさすら感じる。

油断してしまったせいか、大きなあぐびが一つ俺の口から出でしまった。やばい。今の俺はすごく不細工な顔だつただろう。

「……寝不足なの？」

「あ！ う、うん。ちょっと夜遅くまでゲームやってて！ カオス・クロニクルっていうネトゲなんだけど……」

「カオス・クロニクル？」

一瞬で相羽さんの目が大きく見開かれる。相当驚いた様子だ。驚いた顔もカワイイ。この表情はレアかもしれないな。

「あれ？ もしかして、相羽さん知ってるの？ 昔は人気あつたみたいだけど、今はもうマイナーもいいとこなんだよね」

「あ、ううん。前の学校でプレイしている人がいたから……渡辺くん。カオス・クロニクルやってるんだ……長いの？」

「んー。まだ1年くらいかな？ 初めてプレイした時、ぜんぜん操作が解らなかつたんだけど、カインっていう親切な人が色々教えてくれたんだ。まるで兄貴みたいな人だったよ。でつかいギルドのマ

スターもやつててさ、何だつけ？ えっと灰色の狼？ すつじく強くて、かつこよくて……憧れたなあ」

「カインが……教えた……そう。そう……なんだ」

「相羽さんもやつてみない？ 僕がめいっぱいサポートするからさ。あつと楽しいよ？」

「これはチャンスだ。相羽さんと接点が出来た。カオス・クロニクルと一緒にプレイして、相羽さんとの思い出を積み重ねていく……学校以外で彼女と過ごす時間を作れる。」

「うん。めんなさい。私、パソコン苦手なの。だから……」

「あ。ああ、そつか。残念だなあ。でも、もし気が変わったら教えてよ。いつでも育成手伝つからさー。」

「うん。ありがとうね、渡辺くん」

残念だ。相羽さんをエルフのヒーラーにして、ヒールしてもらったり、ドワ娘のエンチャントナーにして、バフをかけてもらったり、ダークエルフのナイトにして、守つてもらいたいといつ、一瞬の妄想が盛大に弾けとんだ。

「私、先に行くね」

相羽さんはさつと駆けて行く。学校の昇降口に入つて、下駄箱から上靴を履き替える姿に見とれてしまつ。相羽さんのスカート丈はけつこう短い。他の女子に比べるとまだ長いほうだが……。

『履き替えるその瞬間にかがみこむ姿勢になつて、黒いプリーツスカートから、かぶりつきたくなるような、艶のある白い太ももが露になつた。

俺はたまらず息を飲んだ。これは、まさか。

ボーナスチャンス！？

あ！ あとちよつと！ もう少し、そつだ。そのまま……。

「ナ～ベ～！ よ、おはようさん！」

俺の願いは叶う」となく、代わりに稻田のダリ声と、メガネのフレームが視界に入り込んできた。

「あん！？」

「な、なんだよ何でそんな怖い顔で睨んでんの？ 俺、お前に何かした？？」

「お前は全世界の夢見る青少年の敵だ」

稻田の顔を無理矢理どけると、そこにはすでに相羽さんの姿はなかつた。

## 駅前で発生したイベント

今日も相羽さんの周りにはいつも誰かがいて、賑やかな渦を作っていた。

俺が付け入る隙なんてまつたくない。授業中ちらちらと隣を盗み見る程度で、話しかけるタイミングが中々みつからない。

カオス・クロニクルと一緒にプレイできれば、学校で話しかけられないでも別に気にする必要はないけど……。しつこく誘つたら嫌われちゃう。

……何か接点が欲しいな。

そんなことをずっと思案していたら、いつのまにか火曜日の授業が全て終わっていた。

「相羽さん。一緒に帰る？」

女子グループのリーダーが、カバンに教科書をしまい終った相羽さんに話しかけた。

「……」めぐなさい。今日は、家の用事で早く帰らないといけないの

「やつなんだ。じゃ、また明日ねー。」

「」めぐなさい

相羽さんはそう言つと、カバンをつかんで足早に教室を去つて行つた。転校してまだ間もないから、まだまだ忙しいんだろうな。

話しかけた女子も同じように思つたらしく、相羽さんを引きとめる事はしなかつた。

……俺も帰るかな。確かに今日は漫画の発売日だ。駅前の本屋に寄つて帰るか。

学校を出ると、朝通つた通学路を遡つて駅へと向う。

駅前は本屋やスーパー、銀行や飲食店が立ち並び、夕方にもなれば人でごつた返している。目的の品を手に入れるべく、大型チュー  
ン店の本屋へと足を踏み入れた。

無事に用当ての物を購入して、駅へと向おうとした時だ。本屋のすぐ入り口で大きな袋を抱えた女の子がうづくまつっていた。白い長袖のTシャツにジーンズ姿の、中学1・2年生くらいのかわいらしい子だ。

袋の中身は大量のインスタントコーヒーで、駅前のスーパーの袋にそれがはちきれんばかりに押し込まれている。

あれだけの量を女の子が運ぶのは、きついだろうな。けれど、ち  
ょうど電車が来るいい時間だ。これを逃がすとちょっと待たなけれ  
ばならない。

俺は心中で彼女に手を合わせて、用を合わせないよう過ぎ去  
ろうとした。

一生懸命に袋を両手で抱えようと立ち上がる彼女。ふと、その横顔が視界に入つて俺は足を止めた。

その横顔に見覚えがある。つい最近、どこかで会つたような気がする。そんな考えを巡らせていると、田の前でインスタント「コーヒー」の瓶が大量にばら撒かれた。

「あ！」「ごめんなさい！　おケガはありませんか？」

「ああ。大丈夫。ほら、これ。あ、こっちにも」

「あ、ありがとうございます。お優しいんですね」

「コーヒーの瓶をつかんだ白く細い腕をたどつていくと、気の弱そうな瞳と田が合つた。黒い髪は男の子のように短く切りそろえられており、その下の顔はドワ娘のような愛らしさがあつて、きゅっときつく結ばれた唇が緊張をあらわしていた。

瞳は潤んでいて、今にも泣き出しそうな感じである。

「すごい量のコーヒーだね。これ、全部君の？」

「いえ、お姉ちゃんのです。ぼく、コーヒーは苦くて飲めないから……」「めんなさい」

何故か謝られた。

「いや、それよりこんな大量のコーヒーを妹一人に買いに行かせるなんて、鬼みたいな姉貴だな！　俺だったらそんな姉貴にソバット入れるね！」

「や、やめにゃだれー！ お姉ちゃんは向も悪くないんです。ぼくがこつも、デジで泣き虫だから……『めんなさい』

また謝られた。

なんだか見ていてかわいそうになつた。じょうがない。乗りかかった船だ。どうせ帰つてやることこつたら、ゲームくらいだし、たまにはボランティアも悪くないだろ。

「君、お家どーへ よかつたら 」

「やめてくださいー 誰か、助けてー。」

「は？」

「お姉ちゃんに言われてるんです。知らないおじさんに声をかけられたら、股間を蹴り潰して顔面にツバ吐いて逃げられて……ぼく、ツバを吐くのはちょっと……」

どんな姉貴だ！ てか、股間を蹴るのに容赦は無いのかこの子は。

「別に怪しいもんじゃないよ（このセリフ、怪しい奴のセリフか）。この近くの高校の生徒なんだ。ほひ、学生証。な？ 田の前で困っている女の子がいたら助けるのは当然……」

俺、さつげにサムいな。

「『』めんなさいー。」

「いや、だから謝りなくていいって。体力には自信があるし」

「あの、そういうなくて……ぼく、男……です」

電撃が俺の体中を駆け巡った。この子は一体何を言つてこりのだらうか、一瞬思考が停止する。

「え？ オトーッ？ ああ、音子とかこう音前？」

「ぼくの名前、潤です！ 音子じゃありません！」

## ちょうどいい

潤は、小さな肩を震わせ頬を赤く染めて叫んだ。それに驚いた周囲の人々が何事かと振り向き、俺は冷たい視線の集中砲火を受ける。

潤の瞳はすでに決壊寸前のダムのようになっていて、今にも泣き出しそうだ。

「あ、えーと。潤。その、気に障ったなら謝るよ。ごめん。その、純粋に助けたいだけなんだ。その、重そうだったから」

「ごめんなさい。取り乱してしまいました。お姉ちゃんにもよく言われるんです。『あんたは男らしくない』って……毎日……だから、ごめんなさい」

「いや、そんなに謝らなくても……とにかくさ。半分持つてあげるよ。俺、目の前で誰かが困ついたらほっとけないんだ。だから、手伝わしてくれよ」

潤は、まるで信じられない物を見るような目で、俺の顔をじっと見つめる。背は俺よりも10cmは低い。上手づかいで見つめられている形なつているわけだが……。

やはりこの子の顔……どこかで見覚えがある? けれど、潤に出会ったのは今日が初めてだ。最近出会った誰かに似ている……だめだな、答えが出てこない。

頭の引き出しを一生懸命ほじくり返していると、潤が少しばにかんだ様子でぼそぼそとしゃべりだした。

「あの……じゃあ、お願ひします。本当ほほほく、少し困っていたんです。『めんなさ』」

『「めんななせ』とこつのが口癖になつてしまつてゐるのか、潤の口から何度も『『めんなさ』』が連呼されている。

「じゃあ、俺いつ持ちつよ。で、家はどひかへ」

「あの、三十一日です。ここからだと一〇分くらい歩いた所になりますね。付いてきてください」

潤はそつと、俺に背中を向けて高校の方向に歩き出した。すると、みるみる小さな背中が遠ざかっていく。

「つづ歩くの早いな。ちょっと待つてくれ、潤」

速度を上げて潤に追いつくと、横に並んで一緒に歩き出す。

「それにしても……ほんとすこし量のコーヒーだな。これを一人で飲むのが、君のおねーさまは」

「お姉ちゃん、コーヒー大好きなんです。お砂糖も、ミルクも入れずに飲んじやうんですよ。すごいです。それにしても、この街に親切な人がいて本当に良かつた。越してきてまだそんなに時間が経つてないから、知り合いも少ないんです」

「せうなんだ？　じゃあ、このくんはまだあんまり詳しくないのか」

「はい。だから、本当は声をかけてくださった時、すつじぐれ嬉しか

つたんです。でも、誰にも迷惑をかけたくないで……」

「気にするなよ。俺でよければいくらでも声をかけてくれ。困つて  
いることがあるなら、力になるぜ?」

「ありがとうございます! よかつた……いい人に知り合えて。あ、  
そういうえば……まだお名前聞いてませんでした。ごめんなさい」

「そういえば、まだ名乗つてなかつたな。

「ああ。渡辺 翔つていうんだ」

「渡辺さんですね。本当にありがとうございます。けど……どうし  
てそんなに親切にしてくれるんですか?」

「ん? んー。ゲームでさ。ものすごく親切にしてくれた人がいた  
んだよ。それまでの俺つて、別段他人に興味が無くてさ。目の前で  
誰が転げようが、ケガをしようが見て見ぬフリをする人間味のない  
奴だつたんだ。そんな俺に、1から10までそのゲームの事を手取  
り足取り教えてくれて……勉強も教えてくれたつけ。とにかく、誰  
にでも優しくつて、強い人がいてさ。憧れたんだ。俺もあんな風に  
なりたいって」

「そりなんですか」

「けれど、ある日……その人は俺の目の前から突然姿を消した。後  
で聞いた話じや、初心者の相手をしていく時に何かあつたらしくて  
……しかも、それが原因で自分の作ったギルドからも追い出されて、  
仲間からも色々言われたらしくてね……。俺は、そのことを知らな  
かつたとはいえ、力になれなかつたんだ。あれだけ世話になつたの

に……だからや。田の前で困っている人は助けてあげようって思つよつになつた。ゲームの中でも、リアルでもね」

カインは、多くの事を俺に教えてくれた。だから……俺もカインのようになつくりたいと思つた。だから、相羽さんがカオス・クロニクルをプレイするのであれば、カインがしてくれたように接してあげたい。

「すごい人ですね。渡辺さんつて」

潤が瞳をつぶつぶると輝かせながら、感動していた。

「いや、すごいっていうのならあの人だよ。いつかリアルで会えたらなつて、ずっと思つてたけど……MMOだからな。きっと色々あるんだ」

「そうなんですか……それ、なんていうゲームなんですか? ぼくもやってみたくなりました。渡辺さんのやつているゲーム!」

「カオス・クロニクルだよ。基本料金は無料だから、PCとネットの環境さえあれば、大丈夫」

動作するために必要なスペックもあるが、細かく話すと長くなってしまうので、この場は置いておこう。

「それ、知つてます! つちのお姉ちゃんも昔やつてました。今はどうかわからぬけど……」

「そつかー。じゃあ、潤のねーちゃんどこかであつてるかもしないな、俺。世間つて狭いね」

「あ、でも。ぼくPICO音痴なんです。お姉ちゃんはすりしゃべ詳しいんですけど、カオス・クロニクルの話に触ると怖くて……」

「持つているのはノート?」

「はい」

「それなら、今度俺がセットアップしてあげるよ。家にはクライアントデータの入ったCD-ROMがあるし」

ちなみに、カオス・クロニクルのゲーム本体は公式ホームページから無料でダウンロードできる。

「本当にですか!? ジャア、明日行つてもいいですか?」

「明日が……いこよ。水曜は5時間目で終わるし、駅前で待ち合わせじょつか?」

「はい。じゃあ、ぼくの携帯のメールアド教えておきますね」

潤はやつ言つと、ローリーの袋を地面に置いてポケットから携帯を取り出した。

俺も胸ポケットから携帯を取り出し、赤外線通信で番号を交換する。

「これでよし。じゃあ、明日はまじ持つて駅前に……そうだな。3時でいいかな。着いたらメールいれるからね」

「はい。本当にありがとうございます、渡辺さん。あ、ぼくの家すぐそこなんで、ここまででいいです！」

俺は持っていた袋を潤の左手に握らせた。

「潤はたいへんだな。俺は長男で下に妹がいるから、姉貴がいる奴の気持ちはわからないけど、苦労しそうだ」

「そんなことないですよ。確かにお姉ちゃん、普段は怖いけど優しい時もあるし、両親がいない時は」飯も作ってくれるんです。それに……たつた一人のお姉ちゃんですから。だから、大事にしないと

「今の言葉……家の妹のアホにも聞かせてやりたい！　あいつ、俺に蹴りいれるわ。家族共用のＰＣに入れといた工口画像を全部削除するわ。トイレに忘れた工口本を、俺の部屋でキャンプファイヤーするわ……妹の風上にもおけん奴なんだ！」

「えっと……それはたいへんですね」

俺の2つ年下の妹……名を愛紗あいさといつ。とにかくにも生意氣で、兄妹仲は基本的に悪い。潤の性格を少しは見習つてもらいたいものである。ていうか、潤みたいな弟が欲しかった。今から両親に頼んでも、もう頑張れないから無理だらうけど。

「それじゃあな、潤。色々がんばれよ」

「はい、色々がんばります。さよなら、渡辺さん！」

潤の後姿が住宅街の角で消えて、俺も歩き出す。しばらく駅までの道を歩いていたが、ふと思い出して携帯の電話帳をチェックして

みた。

潤の番号などを一応確認しておこう。電話帳を開いてすぐに潤の名前が見つかった。フルネームで登録しているらしく、あ行のトップにその名前があつたからだ。

「相羽 潤……。相羽？ 相羽さんと同じ名字か……偶然か？」

いや、まで……そういえば、潤は姉がいると言っていた。相羽といふ名字は珍しいと思う。それに、今になつて考えれば潤の横顔が誰に似ているかだなんて、すごく簡単な事だ。

相羽 真理奈。彼女は潤の姉なのだ。そして、またまた潤の話通りであれば、カオス・クロニクルをプレイしていたという……けれど、朝会ったときはプレイしていないと言つた。

『カオス・クロニクルの話に触れる怖くて』という潤の言葉。もしかしたら、何かあつたのかもしれない。けど、何が? 解らない……。

そういえば、朝、カインの話題になつた時……視線が鋭くなつた。あれは気のせいなんかじゃない。まるで別人のようない……。

相羽さんは……カインのリアルの知り合いなのか? もしくは、俺と同じようにカインに世話になつた初心者の一人かもしれない。

聞きたい。そう思った。もし、カインの事を知つてゐるなら……カインに会つてみたい。今どこでどうしているのか、今のカオス・クロニクルの状況を伝えたい。

カインが戻つてくれば、きっと前のよつた活気に満ちて……俺も、灰色の狼に戻れるかもしね。そしてもう一度、カインと一緒に冒険がしたい。あの頃みたいに……。

とはいへ、この話題は彼女の前ではタブーらしい。普通に聞き出

すのは無理だな……どうするか。

俺は駅の改札を通過と、ホームで電車を待ち続けながら色々なことに思いを馳せていた。

\*\*\*\*\*

桜。フェイブナイトで現サーバー最強のナイト。彼に出会ったのは1年近く前……。

今のパンのように装備がめちゃくちゃで、T-1とは違うM.O.Bを攻撃したり、ダンジョンで迷子になつて狩り開始の時間が30分も遅れたことがあつた。

でも、真面目な奴で教えた事はすぐに覚えるし、ときおり言う[冗談もなかなか笑えるし、優しい奴だった。

聞けば、オレと同じ年で高校生らしく、何度か勉強を教えたことがある。ちなみにあいつの桜という名前は、好物のもみじまんじゅうからとつてきたりしい。

漢字一文字でとってもカッコイイ名前だと思つてたのに、ちょっとがっかりした記憶もある。

いつからかな。桜が隣にいるのが当たり前になつたのは。ログインするとあいつがいて、ギルドメンバー数人を引き連れギルドハント……ギルメンのみで構成されたパーティーで狩りをしたものだ。

桺と話したい。あいつはいつもオレの味方だつたから……新しい生活に、新しい家に、新しい繋がり……正直、かなり戸惑つてゐる。桺と話して……でも、今のはオレは『エルト』なのだ。桺の知つてゐるオレではない。だから、無理なんだ。けれど……。

「エルくん。こんばんわんわん（^ ^）ノ」

いつの間にかアンガロケインして、オレの皿の前に立っていた。

——ああ、パンか。相変わらずだな」

「ブンは相変らず元気だよ～～へへ▼  
ブンから元気取つたら何も  
残らないもん！」

ブンはぐるぐるとオレの周りを、鎖から解き放たれた犬のように走り回る。ちなみにここは、ミロンの村を一步出た所だ。

「そうだな」

面倒なので、適当に相槌を打つておく。

「エルくんひどい……」

「やつだな」

何か考え方？？

走り回るのをやめたパンがオレの前までやってきて、顔を覗き込んだ。

「いや、別に」

「何だよ」

「いや、違うし。オレ、恋なんてしたこともないし、興味とかないから」

これは本当の話。17歳と2ヶ月生きた今でも、恋なんてものはしたことがない。何度も告白をされた事はあるが……すべて断つてきた。

「ええ、つまんない……」

「つまらん。はあ。で、ヤマモトはどうだ？」

一応オレ達はフレンド登録をしているので、それぞれがログインしているかいないかを知る事ができる。さつき確かにヤマモトがログインしていたのだが、いつのまにログアウトしたらしかった。

「わかんない！」。どこのいつたのかな（？ー？）

ヤマモトの姿を求めてカメラを動かすと、ドワーフの少女がどこどここちらに走ってきた。ちなみに、すべりおるではない。

ピンク色のサイドテールの髪に、体には不釣合いなほど大きな胸

……短めの黄色いスカートのよつなローブをはいており、へそが見えていた。トップスも黄色いシャツでそれが前述の胸によつて窮屈そうなイメージである。

「ヒルトお兄ちゃん～」

少女はオレに向つてソーシャル抱きつくを強要して来た。無論、これを拒否する。

「誰だお前は」

「わざわざ……私の事忘れかけなんて……」

デワーフの少女は泣きじゃくり、パンの胸に飛び込んだ。

「よしそー、大丈夫？　ヒルくんのお知り合いなの？」

「うふー、うむ　じゃなかつた。セイラ、ヒルトお兄ちゃんのために一生懸命頑張ってきたのにー」

「はあ？　セイラ？」

デワーフの少女の名前を見ると、セイラ・マスオカといつ名前だった。こんな名前に心当たりは無い。

「セイラ、お兄ちゃんの」と大好きだよー。だから……お小遣いちよつだいー。」

「お前……わざと失せろ」

「ぬまじやなつづって、きやあー、ブンお姉ちゃん、エルトお兄ちゃんが怖いー……」

「エルくん、ひどこよー@@」Jの子がかわいそうだよ

「ブン、モードをどけ」

ちなみに、ヒーラーにも一つだけ攻撃魔法がある。『ライトブレッヂ』とこう名前で、威力はウイザードのそれとは遠く及ばないが、なによりマシ程度のものだ。

オレの足元に六芒星の魔方陣が発現し、光の塊が目の前の空間から出現すると、それがセイラ・マスオカの体を貫いた。

「ちよっと、エルくん@@!~.」

「ぬを。ぼくちんのHPが一桁に……ガクブル（。。。）」

「ネカマジックは楽しいか？ ヤマモト」

キレイなバラには残念なトゲがある

「フフ。バレてしまつては仕方がない。中尉の大好きな口リ田乳を作成した、あなたの心のオアシス、キラ・ヤマモトでござります（

1

「いや、口よりも巨乳も興味ないんだが」

6時間もこれに時間割いたのか、恐ろしい奴だ。

「ヤマガハニ、氣持が悪こかられや」とヤマガクターチンジして  
「へへ」

1

ぬを。  
気持ち悪い。(。。)?

「ど」にそんなバカでかい乳揺らした幼女がいる。いや、それ以上に中身がお前だという時点で吐き気がする」

「ひどす！ ちくしょうめえ……せつかく考へた惣殺ポーズで、中尉を昇天させてやるうと思つたのに一ばかやうう——へへ むつさい縁のおっさんでハアハアいつてやるからなー！ 待つてろオオ

セイラ・マスオカは迷惑にもシャウトで叫んで村の中に消えて行つた。そして、それと入れ代わる形で本来のヤマモトがやつてきた。

やつてきたヤマモト、挨拶代わりにこきなつへんな事をしゃべりだした。

「べ、別にあんた達と冒険したいわけじゃないんだからねー? 仕方なくなんだからねー! 勘違いしないでよねー?」

シントンのつもつなのだらつか? 面倒くせくなつたので、素つ氣無い返しをやる」とした。

「嫌なうりこころよ。やとうなひ」

「ヤマモトやとばこせーーーへへノシ」

「「」のんなさい、『冗談デス。中尉、パンちやん。ビックリのキラ・ヤマモトを見捨てないでやつてくんださこ・・・」

「つまらん冗談はこいから、わつわと狩つこべや」

「ヤマモトのひと大好きだから、見捨てるわけないよーーー」

「ぬを。ふふ、パンちやん。よつやくほくちんの魅力に『氣』が付きましたかー。見よこの筋肉。フフ。わあ、おこでパンちやん」

「昨日炎の祭壇で戦つた、フレイムゾンズはよつも、ちよつぴりかつこいいもんくく」

「ぬを。モブと比べられた……。」

フレイムゾンズとは、十からびたミライラが炎を纏つているイメージのモブである。これよりちょっぴりかっこいと言われてはさ

すがにへこむだろつ。

「いや、待て！ やよっぴりとほこえ、かつこいのだ！ そうだ。ブンちゃんに褒められたのだ！ フフ。見たか中尉よ。ブンちゃんはまくらん元ソソコンなのだぞ！」

「でも、ヒルくんのほづが1000倍かっこいけど（／＼／＼／＼／＼）

キャッ

「ノーナ

「今日も騒がしい。これはこれで……悪くないのか？

一人のやうりとつを気にせず、パーティー・マッチを開いてみると、珍しく30代後半の狩り場のパーティー募集があつた。

「これ、ちゅうどいな。この狩り場なら、オレでもきつぎり適正だし、ブン達でもなんとかなりそうな感じだ」

「ぬを。それよつ中尉！ 」のマッチの主。ダークエルフサマナーですぞ！ ああ……褐色の肌にステキなお山……躍動感満点のヒップ……ダメージ受けたとき、興奮しちゃいそうになる悲鳴。ああ……中尉、止めてくれるな！ ぼくちんはこのダークエルフさんのとこに行つてまいるます（・・・）」

「いや、どこにもダークヒルフの女とは書いてないんだが……ブンはどつしたい？」

すでにハアハアと臨戦態勢に入ったヤマモトはどうでもいいが、ブンはどうだらうか。

「ブンもかまわないよー。ダークエルフのお兄さんって、クールでバイオレンスそいでかつこいこよね（ ）」

田が星になつてゐる……といつか、どこにも男とか書いてないんだが……。

「名前は……Kerberos……ケルベロス？　かな。もう男っぽい名前なんだが……」

「きつと、ステキなクールガイだよ！　残念だつたね、ヤマちゃん　^ ^ w」

「ぬを。なーんだ野郎か……しょぼーん

3人でマッチに入ると、Kerberosがオレ達を迎えてくれた。

「どうも^ ^ アタシ、Kerberosです。読み辛いし、打ち辛いからケルって呼んでね」

「……ふふ。ぼくらの予想通り、お姉さんだった。残念でしたな、ブンちゃん！」

「えー……」

「ケルさん。サモンお願いできますか？」

「はいな^ ^ ちよっぴり待つててね」

「サマナー」にはサモンメンバーという、パーティーメンバーを近くに呼び寄せるスキルがある。これを使えばすぐにメンバーが集められて、狩りの開始をスムーズに行える。

ものの2・3秒でサモンメンバーが発動し、画面が暗転する。

画面の読み込みが始まって景色が開けていくと、周りは木々が生い茂った森の中だった。

ウエルド大森林。30代後半の狩り場で、出現するMOBは主に地属性だ。木に口が生えたマンイーターなど、植物をモチーフにしたもののがほとんどである。

木々の間には小さな川が流れしており、水の流れる音が心を癒してくれる。昼間はうつすらと霧がたちこめており、MOBさえ出てこなければこの風景を一日中眺めていてもいいかもしれない。

「いらっしゃいへへ」

大きな木の下に、ダークエルフの女性が一人座り込んでいた。黒い髪が腰まで伸びていて、薄布一枚を素肌に貼り付けたようなローブを身に着けている。丸みを帯びた四肢。妖艶な眼差しと艶やかな唇。まさしくダークエルフのお姉さんだ。

「女人だーへへ ケルベロスっていうから男の人だと思つてましたー」

「そうよね。こんな名前だと勘違いしちゃうよねへへ； まぎらわしくてごめんねー」

「いえいえいえいえいえ！ ギャップ萌えおおいにけつこつ！ ハアハア」

「ケルさん。フレイブナイトのブンとオークウォーリアのヤマモトです。二人ともまだそんなに狩りの経験がないけど、仲良くしてやつてください」

「はい。解りました。アタシも先月始めたばかりだから、そんなに変わらないと思うけど、よろしくね それじゃ、こっちもダンナを紹介しちゃおうかな」

ケルは立ち上がり、少しオレ達と距離を取つてから召喚魔法を発動した。

ケルの体が少し宙に浮いて、地面に六芒星の魔方陣が発現し、そこから炎に包まれた生ける屍……フレイムゾンビが出てきた。

「ああああん。ダーリン。愛してるぅ ねえねえねえ！ 見てよこの薄汚れた皮膚と、あるか無いかわからない空洞みたいな目！ 足とかこれでマジで立てんの！？ ていうくらいガタガタのヨレヨレ！ やばいやばいやばいやばいー！ アンデッド最高 ね、逝けメンでしょ、うちのダンナ？」

オレはブンやヤマモトクラスの変人はそうはないと思っていたが、世界は広いようだ。

『ふれかぬなよ』（前書き）

あけましておめでとうございます。  
今年もカオス・クロニクルをお願いします。

## 『ふわふわるなよ』

ケルはべたべたと炎に包まれた屍にまとわりつく。その様子にオレを含め全員ドン引きしていた。

「あああああー、おっ始めるわよ、ヤロウヰー、アタシのダンナのアシストよろしく」

「

ケルはそう言って、ダンナ……フレイムゾンビをMOBの群れに突っ込ませた。

オレ達も遅れないようにそれに続く。パンがMOBにヘイトをして、近寄ってきたところを全員で叩く流れだ。要は昨日と同じである。

パンのヘイトで引き寄せられたマンイーターに、炎に包まれたダンナの右手が直撃する。炎の打撃エフェクトが激しく鳴動し、マンイーターは瞬く間に枯れ木となって大地に還った。どうやら、クリティカルヒットが出たらしい。

ケルはフレイムゾンビこと、ダンナの勇姿に見惚れていた。相当あのアンデッドに愛着があるようだ。サマナーを選択する人間というのは、変わり者が多いという噂を思い出す。

基本的にサマナーはソロ特化の職業だ。召喚獣専用の回復魔法と強化魔法をそなえ、自分の手足として扱う。召喚獣は一緒に狩りをすることできレベルが上がり、成長ポイントを好みのステータスに振り分けることが出来る。

フレイムゾンビは攻撃力特化のM.O.B.なのだが、あの様子を見る限り、さらに攻撃力に成長。ポイントを割り振っているのだろう。強化に強化を重ねたダンナの一撃は凄まじい。

それも、ヤマモトの出番がほとんどないくらいで2、3発のダンナの攻撃で次々とマンイーターの墓場ができるがつていく。

「ああああん。ダーリン。最高 ねえねえねえ！ 見てよあの炎に包まれた手！ あんな腕に激しく抱かれたいと思わない！？ プンちゃん、ヒルトくん？！」

何でオレにまで振つて来る……いい迷惑だ。

「けつこうです」

「」の人は相当変わり者だ。

「ブン、冷え性だから暖かいの大歓迎です\* ^ ^ \* ダンナちゃんのツルツルした頭がなんだかカワイイですね、きやは。」

「」

類は友を呼ぶんだな。

「」

「どうした、ヤマモト？」

「ダンナさんハアハア……フレイムゾンビは生前麗しき乙女であつたという公式設定が……」

「じつは炎を逆髪のよう、ちょっとグロい頭部から噴出して  
いるダンナが、生前麗しき乙女だと言われてもしつくりくるはずも  
ない。しかし、ヤマモトはそこからさらに想像力をめぐらせ、その  
姿を脳内で補完したようだ。

「じつは、相手が女なら生きていようがアンデッドだろうが、ど  
っちでもいいらしい。本当に何でもアリなのか。

ダンナが凄まじい勢いでMOBをひねり潰して進む。正直、オレ  
とヤマモトはやることがなかつた。

ブンがMOBを引いて、それを一方的にダンナが倒すというも  
ので、あまりにも単調すぎて拍子抜けする。だから、気を緩めてしま  
つた。まさしくその『矢』先。

「きやああああああああああ！ だ、ダーリンがあああ！ く  
おらああああ、どこの誰じやい！ ウチのダンナの頭に矢あ放つた  
んは！？」

凄まじいケルのシャウトがエリア一帯に響く。どうやら、ダンナ  
が攻撃を受けたらしい。それもただのMOBではないようだ。

「あ でもでもあ。頭に矢が突き刺さったダンナもステキ……」

……いいのか。

しかし……ここは植物系のMOBが主体の狩り場だ。弓で攻撃し  
てくるMOBはヒューマノイド系がほとんどで、このウェルド大森  
林には存在しない。

「エルくん、お肉屋さんだよー、ほらあれへへ」

お肉屋さん……ブンが動き出した先、小さな川の向こう岸には二つの人影……肉屋がいた。ダンナを攻撃したのはあいつらしこ。

「I.IJは私の狩り場。それ以上近づくな、ヤクする」

一方的な肉屋の発言。……「冗談じゃない。一度ならず」一度までも……昨日だつてキレる寸前でなんとか押しとどめたのだ。一言文句を言つてやらねば氣がすまない。

オレはエルトをみんなから一歩前に出し、キーボードを素早く叩き込んだ。

「I.IJの狩り場は、昨日の炎の祭壇の倍はあるでしょ? いくらあんたでも全部のMOBを狩りつくす事はできなはずだ。こっちが端っこで狩りをすれば、住み分けができるんじゃないですか?」

しばらく沈黙があつた後。肉屋は再び口を開いた。

「駄目。MOBが足りない。お前達はよそで狩れ。ここは私が4時間前から使つてる。それでもここで狩りを続けるなら」

肉屋のセリフが終わると同時に、エルトのHPゲージが赤く点滅した。

「PKする。お前達全員」

エルトのHPは一桁になつてしまつていた。肉屋の放つた矢が深々とエルトの胸に突き刺さつている。エルトは荒い息を吐いて今に

も倒れそうな状態だ。ディスプレイに映る肉屋の身勝手な振る舞いに、オレの中で熱いモノが煮えたぎった。

『ふざけるなよ』。それは、誰もいない暗い部屋で呟いたリアルの自分の言葉。ぬるくなつたコーヒーを飲み干し、キーボードに指を走らせる。

「エル君に何するの〜〜」

ブンがオレの想像を裏切り、真っ先に肉屋に攻撃を仕掛ける為、動き出した。川を挟んで向かい合う形になつてているわけだが、ブンは川を越えるまでに無数の矢を体中に受け、まるでハリネズミのようになつてている。普通なら即死レベルのダメージを受けているはずだが、持つていた回復薬類を全て使用してなんとか耐えているようだ。だが、もう持たないだろう。

「ブン、やめろ！ お前が死ぬぞ！」

「大事な友達にこんな事されて、黙つてられないよ〜〜」

ブンが川の中ほどで歩みを止めた。するとブンの体に光が集まり、それが全身を包み込んだ。そこに再び無数の矢がブンに襲い掛かる。だが、ブンは倒れない。どうやら、防御力を極大化するスキル『ファイナルプロテクション』を使用したらしい。30秒間の間、自分の防御力に+3000されるそのスキルのおかげで、ブンは力尽きることなく向こう岸にたどり着いた。

ブンはすぐさま肉屋の一人、豚肉500㌘を斬りかかつた。

ブンの放つた斬撃がエルフの女性を横一文字に切り裂き

　　牛肉

500 gが倒れた。

「あれ@@?」

ブンの攻撃はまぎれもなく豚肉500 gを捉えていたのだが、直後に倒れたのは何故かその右の牛肉500 gであった。

「肉屋YOESEESEE! そしてCNSEEEEEE。正義の味方、みんなのアイドル。斬魔様参上! はい、拍手! WWW」

漆黒の塊が牛肉500 gの後ろから現れる……それはPK斬魔だつた。

## たぎる熱い思い

「PK。つざい」

倒れた牛肉500gを見て豚肉500gが発言する。すぐさま攻撃モーションに入り、斬魔に向けて一本の矢が放たれた。

「OSSEE! 当たらないよ～んwww」

だが、斬魔はそれを余裕で避けきつてみせる。それにも構わず肉屋は再度矢を放つ。斬魔は遊んでいるのか、それをのらりくらりとかわし、ソーシャル『笑う』で小ばかにしたような低い笑い声を上げると、装備していた防具を脱ぎ、裸（裸体という意味ではなく、防具未装着をいう）になつてわざと攻撃を受けてみせた。

逆上した肉屋は、今もなお裸で笑い続ける斬魔に向けて、スキル『ペネトレイトショート』を豚肉500g 鶏肉500gから同時に放つが、斬魔はそれを待つていたかのように忽然と姿を消し、鶏肉500gの背後を取ると、デュアルスタッフで瞬殺した。

「クソ肉乙www 全部まとめて合挽きミンチやなwww」

残された豚肉500g[斬魔が容赦なく罵声を浴びせる……肉屋に注意が向いている今、この隙を突くしかない。

「ブン、じつちに戻つて来い！ 肉屋と斬魔が潰し合つている間に逃げるぞ。ケルさんも、いいですね？」

「あーーー、ちょっとまつてえ……」

ケルから了解を取り、ブンがリターンの適用範囲内に入ったのを確認して、リターンを発動させる。

リターンの発動まで5秒。4……3……しかし、普段の行いが悪いのか、こういう時に限って嫌なことが起きる。

突如、オレの目の前に出現したマンイーター。まずい。こいつはアクティブモンスターだ。プレイヤーが近くにいれば、向こうからやってきて攻撃を仕掛けてくる。

しかも、オレはさつき肉屋から受けた攻撃で瀕死の状態なのだ。一撃でもこいつの攻撃を受ければエルトは即戦闘不能となり、発動中のリターンは解除され、ブンも、ケルも、ダンナも、ついでにヤマモトも斬魔にやられてしまう。

他の誰かがこいつを倒そうにも、離れたブンをリターンの範囲に入れる為、ケル達から遠ざかつたのがまずかった。

ダメだ。やられる。

マンイーターがオレの眼前に迫る。攻撃の間合いに入ってしまった。だが、まだリターンは発動しない。

その時。急に視界が白い物に遮られ、マンイーターの断末魔が聞こえた。

その白い物は、よく見ると長い銀髪で、フェイブの青年の後姿だった。巨大な剣を構え、青年は斬魔に向かって駆けて行く。

その姿を捉えてすぐ、リターンの詠唱が完了しロード画面に移行すると、ディスプレイは暗黙を映し出した。

「栻……？」

唯一の光源であつたディスプレイの光すら失つた完全な暗闇の中で、オレは一人そう呟くと、一人安堵した。

「」の数日で一度もあいつに助けられた。今の今まで……1年近くすれ違つことさえなかつたのに……。

ふと、目の前に一筋の光が差した。それは何の比喩でもなく、単にロードが終わり、画面の読み込みが始まつただけだ。

氣を取り直して、再び意識をゲームへと戻しディスプレイに視線を注ぐ。

ロードが終わるとディスプレイには、ミロンの村とブン達の姿が映しされ、全員の無事が確認できた。

「エルくん怖かつたよーー(・・。・。)ー

村の中心で、ブンがオレの姿をみつけるとすぐに駆け寄つてきて、ソーシャルで抱きついてきた。

「全員無事みたいでよかつた」

「あれつて、斬魔よね？ 肉屋をPKした後、誰かと戦つたみたいだけど、エルトくん誰か知つてる？」

ケルもあの瞬間を叩撃したらしく、オレに意見を求めてきた。

「オレも見たのは一瞬だから、確証があるわけじゃないけど……  
だと思います」

「桜つて……確かトーナメント一位で、元灰色の狼の？」

「詳しいですね、ケルさん」

「そうだ。桜は元々灰色の狼に所属していて、ある時ギルドを抜け  
てフリーになつた。どういう経緯でそつたかは知らないが、今  
は一匹狼になつてPKKをしている。」

「アタシも一度世話になつた事、あるんだよね。ダンナと召喚契  
約できたのも、あの人^が手伝つてくれたお陰だし」

桜はPKK以外にもそんな事をしていたのか……。

「ねーエルくん。桜さんを助けに行かない？」

「はあ？ お前はアホか。桜が負けるわけがないだろう、行つたら  
ただの足手けっしゆまといだ」

「はんが突然わけの解らないことを言い出したので、即否定してや  
つた。

「でも、PKの斬魔さんつてPKギルドのマスターさんなんでしょう  
(?—?) 今日も一人とは限らないんじゃない？」

意外にも、パンはオレの言葉に逆らつてきた。だが……確かにそ

うだ。

斬魔はPKギルド『ヴァーミリオン』のギルドマスターである。前回の教訓から伏兵として仲間を回りに潜ませているかもしない。多対一では、さすがの桺でも負けるかもしない。

「ぼくちんもブンちゃんに賛成ですよ。この前ぼくちんをバカにしたお礼もしてやりたいし、例え死んで経験値が減つたとしても、あいつに一撃入れば満足しちゃいます」

「アタシは元々桺の世話になつてるからねー。やるつていうんならダンナが力を貸すよ?」

いや……状況がはつきりしていない以上ヘタに動くのは危険だけれど……気にはなる。

斬魔は短気で粘着質な奴だ。一度受けた屈辱は必ず返しに来る。どんな手を使ってでも。

その斬魔を先日から桺が追つていた……ならば……ブンの言う事もあり得るかもしれない。

「わかった。けど、まずは状況を確認してからだ。オレが一人でさつきの場所に戻つて状況を確認する。なにかあればすぐにチャットで知らせるし、危なくなつたら即リターンして逃げる……いいか?」

全員がそれに賛成したのを確認し、テレポーターを使ってウェルド大森林へ一人向つた。

周囲のアクティブモンスターに察知されないように注意を払いつ

つ、先ほど肉屋と斬魔がやりあつていた川まで戻つてくると、オレが見たのは森の奥へと消えていく斬魔の後姿だつた。

まさか…… 桧は……？

周りには誰もいない。いや……倒れている三人のエルフに気が付いた。

肉屋なら…… 何か知つているかも知れない。

「何があつた？ 斬魔と戦つてたフェイエブはどうへいつた？」

素早くキーボードを叩き、肉屋から情報を聞きだす。

「やられた。急に動きが止まつて、斬魔が一方的に一人で殴り続けてたら、やられてた」

「やられた？ ちょっと待つて。『一人で殴り続けてたら』てことは斬魔一人つてこと？」

「読解力なさすぎ。斬魔はずつと一人だつた。たぶん、回線が切れたか、ラグの間にボコられたんじゃないの」

素直に答えてくれるとは思わなかつたが、一応聞きだす事はできた。どうやら相手は斬魔一人で、桜がPCの不調か何かで動きが止まつた時を突かれ、やられてしまつたようだ。

桜を…… 許せない。不意打ちでPKをするとは…… この前の礼もある。せつかくレベルを上げたブンやヤマモトの経験値を奪つて、その上にツバと罵声を浴びせた斬魔……。

桜は今どうしているだろうか？ ここに死体がないということは、すでに村に帰還してしまったか、そのままログアウトしてしまったのかもしれない。

そのままではあいつがかわいそうだ。仇をとつてやりたい。

あいつは、曲がったことが嫌いで正々堂々を好む奴だった。だから、この状況に憤っているに違いない。初心者の頃から見ていてから解る。……PKKになったのも、おわりくPKを減らして、少しでも他のプレイヤーが安全に狩りができるようにということだろう。

オレはすぐさまマップを開いた。斬魔が逃げていった方向を確認する。

ブン、ヤマモト、ケル、そしてオレのレベルとスキルを全て再確認。

条件は整っている。

やれる。

まったく。あれほど熱くなるなど自分に言い聞かせていたのに…  
…これではヒーラー失格だ。

でも、今はそれでいい。1年振りだ、この感じは。

他人に対して熱くなつたのは。

やつてやるか。そのためにも、こいつの力が必要だ。

オレは、リザレクションを使用して肉屋を蘇生した。

蘇生された肉屋は状況を飲み込めないので。少し間を空けてオレに問いかけた。

「何で蘇生した。頼んでない」

「斬魔が憎いか?」

「当然。3回殺したい」

「なり手を貸せ。その為にお前を蘇生したんだからな」

「何をするの?」

少し興奮していた自分を落ち着かせ、コーヒーを少し口に含む。キーボードの上の指を静かに早く動かし、オレの目的を肉屋に伝える。

「斬魔をP.K.Kする」

## 張り巡られた罠

「斬魔をPKK? バカじゃないの。レベル差がありすぎる、絶対に無理」

当然の答えである。しかし、策はある。その為にもいつを口説き落とさないといけない。

「ちゃんと考へはある。それとも、お前はあいつに言われたことをもつ忘れたのか?」

『クソ肉』。『合挽きミンチ』。その二つの単語が肉屋の頭の中で蘇つたのだろう。すぐに問い返してきた。

「何をすればいい?」

単純な奴で助かる。さつき受けたこいつの攻撃と身勝手な振る舞いは、心の奥そこで消化されずに燃え残っているが、この際だ。利用させてもらひ。

「簡単なことだ。今すぐ斬魔を追つてくれ。そして、後ろから絶えず斬魔を』で狙撃。当たらないだらうが、当たなくていい。斬魔を攻撃し続ける事に意味がある」

「当たなくていい?」

「そうだ。この森の奥からフィールドに出れるが、その奥にあるダンジョン。『魔竜の巣』に足が向くように仕向けてくれればいい、オレもしばらくしたらすぐに後を追う

『魔竜の巣』はレベル70代のソロ用狩り場である。しかし、M OBの経験値とドロップが釣り合わず、マズイ狩り場として有名な所だ。そこに斬魔を誘導する。

「斬魔がもし二つに分かれてしまったら？」

「それはない」

「何でそういう切れる？」

「そういう予定になつていいからだ。それとも、怖いか？　お前はあいつの言葉通りの奴なのか？」

「違う。わかつた。やる。すぐにあいつを追つて、3キャラで弓を連射する。それでいい？」

「それでいい。斬魔が魔竜の巣に入つたらお前の役目はそこまでだ。あとは遠くで観察するなり、ログアウトしてくれて構わない」

「わかつた。行ってくる

「二つに分かれしゃい」

我ながら苦笑してしまひ。これだけ心のこもつていらない言葉はないだろう。あいつにはせいぜい役に立つてもらわねばならない。

肉屋が斬魔の消えた森の奥へと入つていいくのを見届けて、オレはパーティーチャットで斬魔討伐作戦の概要を皆に伝えた。

皆は最初少し驚いたが、納得してくれた。ここで誰かが反対すれば、この計画はおじやんになり、追つて行つた肉屋は斬魔に再度PKされてしまつだらう。

それはそれでいい。あいつへの恨みはそこで晴らせる。だが、今一番の優先は斬魔だ。

そのためにはあらゆる手段を使う。PKは装備やレベルだけでは勝敗が決まるわけじゃない。スキルの使い方や経験しだいでいくらでもひつくり返せり。

それを……やり始めて1年足らずのハナタレ小僧に教えてやる。

オレの指示通りに皆が動く。1年前のあの頃の感覚が蘇つてくる。……ギルドを率いて数々の敵と戦っていたあの頃を。

やがて準備が整い、あとはオレの指示を待つのみとなつた。

「これから少し、忙しくなる。まずは、第一段階だ。

「PK斬魔がウェルド大森林に出ました！　付近で狩りをしている人は気をつけください」

オレはシャウトでそう叫ぶ。

「HURRY UP! 次回はお前PKなWWW

律儀にシャウトでそつ返してくる斬魔。バカな奴。これが終わりへのカウントダウンとも知らずに。

「PKKですか？　PKK行きます

斬魔のシャウトが終わってすぐ、ヴェルカといつも前のキャラクターが、シャウトでオレに問いかけてきた。

「森を出ですぐの所です。今どいですか？」

オレもシャウトで返す。

「ミロンの村です。準備してすぐに向います」

「お願いします」

ヴェルカ……斬魔ならばこの名前を知らないはずがない。PKギルドが存在するならば、それと対をなす、PKKギルドも存在する。このヴェルカといつのは、そのPKKギルド『三散花<sup>さんか</sup>』のギルドマスターなのだ。ヴァーミリオンと三散花は常に戦争をしている。

その三散花のリーダーがミロンにいる。これで斬魔はおいそれとミロンの村に帰還できなくなる。あとは、肉屋が斬魔を魔竜の巣へと誘導してくれるのを、後ろから見届ける作業に移行する。

村に帰還できない斬魔は、このまま魔竜の巣へと逃げるしかない。立ち止まって肉屋をPKしている間に、三散花が来るかもしれないリスクをわざわざ追つたりしないだろう。

ちなみに、ログアウトもできない。なぜなら、カオス・クロニクルの戦闘システムは、攻撃を受けてもよけても戦闘体勢に移行する。戦闘態勢中のキャラクターは、それが解除されるまでログアウトは

できない。

ひつきりなしに斬魔の背中目掛けて、肉屋の矢が襲い掛かる。どれも命中していない。だが、それでいい。斬魔は戦闘態勢に入っているはず。ログアウトを封じることが目的なのだ。斬魔は村に帰還することもできないし、その場でログアウトすることもできない……。

これで斬魔の退路は断たれた。向う先は魔竜の巣……そこが奴の墓場になる。

「調子はどうですか？」

ヴェルカがオレにウイスで話しかけてきた。

「もういいぞ、ヤマモト。すぐにそのキャラを削除してキャラクター削除だ」

「ぬを。了解であります、中尉！」

ちなみに、この「ヴェルカ」というのは、ヤマモトに作成させたダミーのキャラだ。そもそも今日ヴェルカはログインしていない。いたとしても、時間的に間に合わないだろうし、斬魔を狩る為とはいえ、こんな低レベルのプレイヤーに協力してくれないだろう。

だからヤマモトにダミーキャラを作成させ、芝居を打つてもらつた。あと、キャラクターの名前は基本的に被つたら登録できないシステムになっている。だから名前の力をカタカナの力ではなく、漢字の力<sup>ちがる</sup>にしている。よく見なれば気付く人間はそうそういない。

単純な斬魔のことだ。まんまと引っ掛けてくれたようで、今もなお駆け足で魔竜の巣に向っている。

斬魔の姿が魔竜の巣の中に消えていくのを確認すると、次はパンの出番である。これが第一段階。

「パン。まだH-YAは持つか？」

「ちよつときついかも~ @@@」

「あとちよつとで斬魔がくる。それまで堪えてくれ」

「あ~へへへへへ」

「ひらも準備が要る。斬魔が魔竜の巣に入ったとはいえ、まだまだ予断を許さない。」

魔竜の巣は巨大な洞窟である。中は入り組んでいて、多数のアクティブモンスターがいる。今のオレ達がここでのM.O.Bの攻撃を受ければ即死亡してしまうだろう。

斬魔なら余裕と言つぱどでは無いが、狩りはできる相手だ。ただし、一対一ならば。

オレの狙いはそこにある。肉屋は言った。『レベル差がありすぎる、絶対に無理』と。なら発想を変えよう。オレ達のレベルで戦うから無理なのだ。斬魔以上のレベルの相手をぶつけてやればいい……そう、ここにいるM.O.Bを使う。

M.P.K。モンスター・プレイヤー・キル。とでもいうのか。これも大

抵はPKが使う手で、大量のMOBを引き回して、同種類のMOBと戦っているプレイヤーのそばに近寄る。

そこで、自分のターゲットを解除するスキルなり、リターンなどでそこからいなくなれば、MOBの敵対心は、その同種類のMOBと戦っているプレイヤーに全ていく。

結果、PKは自分の手を汚さずに相手をPKできるのだ。

ここにはPKを歯に元歯を。

PKにはMPKで應えよう。

だが、前述の通りオレ達のレベルでは、即死レベルのダメージを負ってしまう。そこでブンにファイナルプロテクションを使用させ、大量にMOBを集めてもらっている。

とはいって、それでも想像以上のダメージをもらっているようだ。すぐに逃げ回っているブンと合流して、ヒールライトを連発する。ブンのHPバーが赤くなったり、白くなったりを目が回るくらい繰り返している。

危険な綱渡りだが、あとはこれを斬魔にプレゼントするだけでいい。

耐えろよ、ブン。

しばらくMOBと楽しいかけっこをしていると、斬魔がアクティブモンスターに引っ掛けたり、しぶしぶ戦っている場面に出くわした。

「これで終わりだ。

「おこおこおいおこおこおいおい」

斬魔が明らかにつぶたえている。

「斬魔、ニ」

オレはさうタイプリングして、すぐさまリターンを詠唱した。

「俺だけ死ぬかよ、お前らも一緒にボケwww」

斬魔は、一瞬消えて……オレの背中にデコアルスタッフを叩き込んだ。幸運な事に不発だったが、斬魔の次の攻撃でエルトの詠唱はキャンセルされてしまった。

再使用するまでの時間は残されていない。MOBはすぐそこまで来ている。このままではオレ達も斬魔と心中だ……。

「やまあwww 仲良く一緒に逝きましょう」

と、斬魔は考えているのだろう。

「エルくんvvv ピッコロ、MOBがこいつぱこきうちやつたよ@@」

大丈夫。予定通りだ。

「逝くのはお前一人だ、斬魔」

そして、すぐさまチャットをパーティーチャットに切り替えて、

ケルに指示を出す。

「ケル、サモンメンバーを」

「あいよ～」

一瞬で画面が暗転し、画面の読み込みが始まると、目の前にはダークエルフの女性キャラクターがいた。オレとパンは、魔竜の巣から少し離れた所にケルによつて転送されたのだ。

ケルのサモンメンバーがあれば、リターンを発動させる必要なかつたかもしれない。しかし、念には念を入れておきたかった。

斬魔があの時点では逃げてしまわないとも限らない。だから、斬魔を煽つてオレのリターンを妨害させるように仕向けた。これで今頃斬魔は、MOBの餌食になつていいはずだ。

ヘイトは、何もナイトの固有スキルだけではない。言葉による感情の誘発。それもヘイトだ。

「さて、皆お疲れさん。とりあえず、斬魔がどうなつたか皆で確認にいへば」

オレとパン、ケルの3人は合流すると、斬魔の最後がどうなつたかを確認するため、再び魔竜の巣に戻ろうとした。

すると突然目の前をすゞい勢いで何かが迫ってきた。黒い塊のようなそれは、一振りの短剣を構えて黒い髪を振り乱し、こちらへと一直線に向つてくる。

まさか。

「残念無念～みんなの斬魔様はふ・め・つ～～ www」

斬魔！？

何故……考える間もなく、オレは背後から光の塊に貫かれた。ダメージはさほどではないが、それでもエルトのHPが三分の一ほど削られた。

「このスキルはライトブレッヂ……ヒーラー？」

「戦禍、愛してるうううううううううう www 半分お前にやるわ www  
www オレはあのヒーラーぶつじゅぢゅ！」

「じゃあ僕はフェイブの女の子がいいな。レアじゅん、アレ。化石  
並みの価値だよ」

戦禍。ヴァーミリオン所属のドワーフヒーラーだ。

仲間がいたのか……たぶん、あの戦禍がリターンを発動させて斬魔を救出したのだろう。

斬魔同様に黒いロープに身を包み、ドワーフでありながらダークエルフのような印象の幼い少年……無邪気そうな笑顔を浮かべた幼く愛らしい顔が、斬魔以上の禍々しさを感じさせる。さながら、闇の司祭と言つたところか。

「おい、お前 www ヴェルカいねーじゃねーかよ、人をだます悪い子はPKでちゅよー。バブウ」

斬魔のシャウト。今のセリフから察するに、戦渦あたりから聞いたのだろう。ミロンに危険がないことを知つて帰還したのか。

斬魔と戦禍。その二人に挟まれ、逃げ場は無い。ここは、やはりリターンで逃げるしかない。

「斬魔。あいつリターンしようとしてるよ。止めたら僕の事もひとつ褒めてくれる?」

「褒めるEEEEEE！ 戦禍YAREEE！」

「僕、頑張るね^\_^」

戦禍の足元に六芒星の魔方陣が発現し、エルトの頭上に×マークが浮かび上がる。

……やられた、サイレンスだ。沈黙状態になつたことで、リターンが不発に終わり、その場に取り残されたオレ達と斬魔の距離がだんだんと縮まつていく。

今のオレは無能だ。何もできない。魔法の使えないヒーラーなんて、ただの荷物だ。

「斬魔～僕、やつたよ^\_^～ あとは斬魔が好きにやつちやつてよ。僕、斬魔がPKする所大好きなんだ」

戦禍は無邪気な幼い笑い声を振りまき、スリープを詠唱すると、ブンとケルの動きを止める。

四肢をもがれた昆虫のよび、オレ達は何もすることができないなった。

仕方がない。

できれば、これだけは使いたくなかった。

マウスのカーソルをリストアートボタンへと向わせる。

もう一年近く動かしていないが、やれるだろうか？

オレが長い間このカオス・クロニクルと一緒に生き続けたキャラクター。

桺の師匠で、灰色の狼初代ギルドマスター。  
カイン。

## カインの戦い

マウスを持つ手が震える。

すでに戦闘状態は解除されているので、ログアウトも可能だ。

カイン……1年前のあれ以来か……。オレにとつて今やカインは後悔の象徴であり、消せない傷だ。

ここでカインにキャラクター チェンジするのは、自傷行為でもある。自分の心の傷口にナイフを突き立て、溢れ出した辛い思い出という血を止めようとせず、そこをさらに塩で塗りたくるようなものだ。

待て。待て。待て。

果たしてそこまでする必要があるのか？

お前はアホか？

別にいいじゃないか。PKされるぐらい。少し経験値が減るだけで、また狩りをして元に戻せばいい。

何でオレはこんなにも悩んでいるんだ？ プンなんて……もうすぐオレから卒業してお別れじゃないか。ケルだつて、今日出会ったばかりの人間だぞ？

果たしてそこまでする必要があるのか？

隣でスリープ状態だったケルが、炎の柱に包まれた。HPバーの中身が即座に透過され、0になる。ケルは一瞬悲鳴をあげて、地面に崩れ落ちた。

ケル……。

「比高たんなんテラ遅いwww けど、そこが萌えます

「遅れちゃつたー。ごめんなさい

斬魔の隣に現れたのは、ヒューマンの少女である。装備から察するに「ハイザード」……こいつも確かヴァーミリオンの一員だったはず……。

比高<sup>ひじょう</sup>と呼ばれたヒューマンハイザードも、戦禍同様黒いローブに身を包んでいる。ケルがやられたのは彼女の魔法攻撃によるものだろつ。

比高の登場に気を取られている暇もなく、目の前のブンに、頭上から金と黒のコントラストが降り注いだ。

ブンは一文字に切り裂かれ、戦闘不能になつた。あれはウォーリアのスキル、『クリティカルブレード』……黒い鎧を着たエルフの男が、60レベル代で着用可能な大剣『クリムゾンエッジ』を構え、こちらに振り返つた。

「心機も到着ううwww はい、エルトくん死亡フラグびんびんに立つてます。ちなみにオレもびんびんだよ？ どこが？ 聞くな変態www」

相変りずあるそこ斬魔のシャウト。

「斬魔黙れ。4人も出張る必要あつたのか？ どうからどう見ても初心者さま」一行じゃないか。狩りのし甲斐がないだろ。ない。はつきり言つてない」

心機。したき こちらは知つている。ヴァーミリオンのナンバーツーだ。斬魔と同レベルだと考えて間違いない。

「エルくんへへ

ブンが、戦闘不能になつたままでしゃべりだした。

わかつていい。いくらでもオレを恨め。オレが悪い。オレの浅はかな考えで、しなくてもいいPKKに付き合わされて、MPKの真似事をさせられて死に掛けた拳句、PKされてしまつたんだ。時間も幾分かムダにした。本當なら、もう寝てる時間だろう。

だから、なんどでも罵つてくれて構わない。オレにはそれを聞く義務がある。

「じめんね……ブン、エルくん守りたかつたけどできなかつた@  
@ せつかくすごい作戦成功させたのに、真正面からやり合つとやつぱりブンは何もできなかつたよ～へへ；ブン、役立たずだから

……

やつぱりこいつは……へんだ。こんなくだらなうことこに巻き込まれたんだ。もっと怒れよ。オレなり、怒る。

「じめんね」

「 プンのチャットが表示された。ディスプレイがなぜか、歪んで見える。おかしい、ディスプレイの故障か？ それともグラフィックボードがいかれたか？」

「 punpun321萌えええwww 抱きつく以上のソーシャルないですか？ GMさん？ むひょひょwww」

歪んだ視界の向こうで、斬魔が倒れたプンの上に覆いかぶさりうとするのが見えた。

「 プンに……。確かにそれはリアルの自分の体ではないし、ただ3Dのモデリングに、CGのテクスチャが貼り付けられただけのデータだ。」

「 けれど……そうじゃない。違う。そこにある確かな悪意をひしひしと感じじる。」

「 カオス・クロニクルの……MMOでは、文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来る。ありのままのそいつの姿がそこに映し出される。」

「 斬魔本人にとつては、それは大した行為ではないのだろう。けれど、それはされた方にしか解らない屈辱。中身が女性のプンならなおさら嫌悪感を覚えたはず。」

「 オレだって……嫌だ。」

「 拳を思い切り机に叩きつける。」

「アホは私だ……パンを……こないい子に、こんな事されて……何で黙つて見てるの？」

確かにパンは色々と問題があつて、やきもきやられた。イライラした事も数えるほどある。

けれど、パンがいなかつたらヤマモトや、すべりおゆや、ケルにだつて会えなかつたし、このわざかな時間の間に想に出を作ることもできなかつた。

田頭が熱い。理由は解らない。けれどそれが誰のためのモノで、自分が何をどうするかなんて解りきつている。

果たしてそこまでする必要があるのか？ 三度自分へ問い合わせる。

「あるに……決まってる。私はパンの師匠になつたんだから……レベル40になるまでは、この子に色々教えて、守つてあげなくちゃいけない」

服の袖で涙を拭つて……。ヒのディスプレイを見据える。

歪みは無い。画面にも、心にも。まつすぐに向おひ。

「パン。すぐに戻つてくるから」

それだけチャットで発言し、リストアートボタンをクリックする。

キャラクター選択画面へと移動すると、そこには一人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

エルトと……カイン。

カインを選択して、ローディング画面へ。

いつもなら、特に気にもしないローディング画面だが、今は一分一秒が惜しい。

「早くしてよ……」

自分の口からその一言が漏れ出る。完全に独り言だ。けど、そんなことはどうだっていい。早くブン達の所に戻らなければいけない。

やがて画面の読み込みが終わると、そこは懐かしい場所だった。

初めてできた狩り友との思い出の場所……ミロンの村の前に流れる川……そこで一年前カインはここでログアウトした。もう戻らないと決めて。

ログインすると、何通ものメールが着ていた。どうせ、恨み言の数々だらう。今はそんな物に気を取られている暇は無い。行かないと。

長い金髪をポニーテールのようにしてまとめた髪。全身を包んだ派手な装飾の蒼い鎧。光り輝く剣と盾。

「久しぶり、カイン……」

これもまた、リアルの独り言。

さあ、行こう。ブンの……友達の所へ。

テレポーターを使って魔竜の巣へ。そこから少しばかり歩くとさつきリスタートした場所に出た。

ブンも、ケルも、まだそこにいた。そして。

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「www ヤママトキモスwww」

ヤママトが何故かそこにいて、四方からの攻撃を受けながらも、斬魔に斬りかかっていた。言わずもがな、遊ばれている。

「エルトくんは怖くて逃げたのかな－www それともおしつこい  
ビリまちたかあ？ くちゃいくちゃいwww」

「中尉は逃げねーよ！ 昨日今日の付き合いで、まだよくわからぬ  
一けど。あの人はなあ、優しくて、頭がよくて、ムツツリで女に興  
味ないけど……それでも俺の事、うざがらずに狩りに誘ってくれた  
んだ！ 前のサーバーで、誰からもハブられてた俺みたいな奴を！」

ヤママト……そだつたのか。ブン達がPKされて、オレがいな  
くなつたので様子を見に来たらこいつらに出てくわして……逆上した  
のかもしれない。こいつの事はずつとエロくて、バカで、オタクで

ハアハア言つてるへンな奴だとばかり思つていたけど……本当は心の熱い男なのかもしれない。

「ロボットアニメの主人公はなあ！　ピンチになつたら覚醒して、敵をけちよんけちよんにするんだ！　中尉は今まさに修行タイムで、精神と時の部屋なんだよ！　だから逃げてねえええ！」

後で勝手な設定をつくるなと言つてやるか。今はそれよりも……。

「はいはい www 中二ノノwww じゃー戦禍。キモオタにスリー  
ブいれて、オレ、なぶり殺しにするからwww」

「楽しそうだねへへ　僕もやりたーい」

戦禍に向けて、ヘイトの上位スキル『フォースヘイト』を使用する。

戦禍はみるみるオレの目の前へと引き寄せられ、攻撃の間合いに入つた。そこを攻撃スキル『ホーリーブレード』で一撃を加え瞬殺。

「あれ？　なんで><　なにこれ？」

「あ？　www　どーした戦禍www　ど二いつたwww」

フォースヘイトは敵対心を煽つた上で、敵を近くに引き寄せ防御力を低下させる。ヒューマンナイトの上位クラス『パラディン』がレベル60で覚えるスキルだ。

そしてホーリーブレードは、パラディンが覚える唯一の攻撃スキルで、聖属性を加え、二倍にした攻撃力で敵を攻撃するスキルであ

る。

一番厄介な戦禍を仕留めた。これでヒールができなければ、リターンもできない。あとはじっくり料理してやる。

「斬魔ー助けて！ へんな鎧の奴にやられたー…… しかもこいつすごく強いへへ」

戦禍のセリフを受けて、斬魔たちがこちらに気付く。すぐに見つかり、3人で掛かってきた。

来い。

カインが相手になる。

かつてサーバー最強と言われたナイトの実力を、友達を傷つけられた怒りを。

それを……やり始めて1年足らずのハナタレ小僧達に教えてやる。

「なにこいつwww 一人で向つてくるなんてえらいwww とりあえず戦禍のカタキな！」

斬魔。 比高。 心機。 3人がこちらに向つてくる。

比高がブレイズアローを放ち、炎の塊がオレへと向つてくる。

心機がスキル『メガクラッシュ』を発動し、ジャンプして頭上から迫る。

そして、斬魔が姿を消し、オレの背後から現れデュアルスタッフを叩き込んだ。

三者三様の攻撃がカインに命中する。

カインは燃え、斬られ、突かれる。

ギルドメンバーだけあつていいコンビネーションだ。60代のナイトなら死んでいたな。

「はあ？ｗｗｗ　ナーニコレｗｗｗ　何でダメージが1なの？ｗｗｗ  
ああ、そつかｗｗｗ　ファイナルプロテクションねｗｗｗ　30  
秒間のお楽しみかｗｗｗ」

「違うぞ斬魔。こいつ、スキルなんか使ってない……この防御力で  
……素なのかな？」

「物理的な攻撃なら、でそ？　魔法攻撃なら違うんじゃないの！」

比高がさらにブレイズアローの上位スキル『バーストフレア』を詠唱する。比高の足元に巨大な魔法陣が描かれ、オレの足元が一瞬で溶岩になる。そしてそこから巨大な火の柱が立ち上り、オレは炎の中に消える。

先ほどケルがやられた魔法だ。

だがしかし、彼らには悪いがムダだ。

「ダメージ……0？　え？」

心機を田の前に捉え、ホーリーブレードで一閃。鮮やかな銀の残滓をそこに残して、心機は倒れる。

「おい！ ちょっと待て！ なんだよこのダメージ…？ 一万六〇〇…？」

「おいおいおいおいおい。オレの『テュアルスタッフ』の倍以上じゃねーか。こいつ、ナイトのくせになんでこんな…？」

斬魔が本日二度目のうひたえを見せた。

「比高。逃げるぞ。アレ、絶対無理www」

「わかった」

逃げ出した一人のPK。もちろん逃がすつもりなんてない。あるわけがない。

フォースヘイトの範囲拡大版スキル『マスフォースヘイト』を使って二人のPKを手繕り寄せる。

「なんじゃこれwww 動けないんですけどwww」

「こんなのは知らない！ なにこのスキル！？」

知らないのも当然だ。これは最大レベルまで上げたパラティンしか習得できないスキルなのだから。

これを習得しているのは、カインともう一人……現灰色の狼ギルドマスターだけだ。

先に比高を通常攻撃で戦闘不能にする。

そして、次はメインディッシュだ。

しかし、斬魔は悪あがきを最後まで続ける。真正面に引き寄せたと同時に、デュアルスタッフを打ち込んできた。

しかし、ダメージは1である。

「お前はアホか？　いや、アホだな」

カインのホーリーブレードが斬魔を横一文字に切り裂き、斬魔は力尽きた。

「斬魔乙」

斬魔以外のPKは、次々とその姿を消して村へと帰還する。しばらくして斬魔もその姿を消した後、唐突に斬魔からウイスがきた。

「覚えてろよ。絶対にオレは忘れねえからな」

「オレはもう忘れたよ」

もう返してやった。もうや悔しいだろ？ 『頭にきただろ？』『デイスプレイの前で顔を真っ赤にしているかもしない。だが、それ以上の怒りと辱めを、今までお前達にPKされた連中は味わつてきたんだ。』

痛みを知れ。

さて。ヴァーミリオンの一部とはいえ、マスターとナンバーワンの主戦力を一人で壊滅させた。これで当分やつらも大人しくなるだろ？

オレもすぐにエルトに戻らないといけない。

カインが今日ここに現れた事は、いざれこのサーバーの人間に知られるところになる。

さつき斬魔を煽ったのは、今日エルト達が斬魔をMPKしかけた件よりも、強い屈辱と印象を与えるためでもあった。奴らはたった

一人のナイトにせりひれたのだ。十分すぎるほどオレを憎んでくれるだろう。

これで全ての憎しみがカインにいく。今日の件で、エルト達も、ヴァーミリオンの恨みを買ってしまったが、それとは比にならないくらいの屈辱を貰えてやった。

カインは腹なのだ。ブン達の……だから、それでいい。カインがエルトであるということも、まだ明かすつもりは無い。

ブンを守るためにカインを使つたが、このままカインに戻ることはできない。カインが抱えている問題は根が深い。けれどいざれ向き合わないといけない時が来るだろう。

……カオス・クロニクルにログインしている限りは。

それに、ヴァーミリオンの奴らにエルト＝カインであることがバレば、必ず奴らはオレだけでなくブンやヤマモト、ケルを狙つてくるだろう。

だから、またしばらくカインでログインすることはない。  
何より……今のブンに必要なのは、カインではなく、エルトだからだ。

オレ以外にあいつの世話を、HP管理をできるハーラーはない。

さて、灰色の狼のメンバーに見つかると厄介になる。早々にリストアしなければならない。特に、現ギルドマスターには……。

しばらぐお別れだ、カイン……。

回線の不調で落ちていたところでもして、戻るとしよう。

オレは呆然と眺めていたヤマモトに近づいて、神秘の復活薬を二つ放り投げると何も言わずリスタートした。

キャラクター選択画面でエルトを選択し、エルトとして戻る。

「ぬを。中尉！ 精神と時の部屋でスーパーになつたとですか！？」

田の前には、ヤマモトに蘇生されたのだろう。ブンとケルが全快の状態でそこに立っていた。神秘の復活薬のおかげで、経験値も下がつていなければ。

「なんだそれは。回線の調子が悪かつたから落ちていたんだ。それより、あいつらは？」

「いや、なんか。ものすつじに強いナイトがやつてきて……種割れとトランザムとハイパーモードとゼロシステムとニコータイプが発動したみたいな感じで……あと、ついでに×ラウンダーも（。）（。）」

「」

おそらくカインのことを言つているのだろう。強さの表現がヤマモトらしい。しかし、半分は解るが残り半分はまったくわからない……。

「なんだそれは、意味が解らん。……」めん、ブン。回線の調子がおかしくて、落ちそくなつてたんだ。結局、落ちちゃつて……す

……。

ぐに戻れるとと思つたんだけ……」

「エルくんエルくん、ブンなら大丈夫だよ^ ^ v 蒼い鎧のナイトさんがやってきて、PKさんを倒して、神秘の復活薬を置いていつてくれたから^ ^ かつこよかつたんだよおおおお。あれがカインさんなんだね^ ^ ブン、一日惚れしちゃつたかも(ーーーーーーーー)

ブンは元氣そうだつた。特に落ち込んでいる様子は無い。

「アタシも見惚れちゃつた けど、ダンナに比べたらまだまだけどネ」

ケルも、特に先ほどのPKされたことを根には持つていなさそうだ。カインの登場と、圧倒的な勝利。それが、彼らの中の暗い感情を吹き飛ばしたのかもしれない。

カインを操作した意味はちゃんとあった。

「あー、桜さんだーー。おーい^ ^ノ」

カメラを動かし、ウェルド大森林の方向を見ると、桜がこちらに向つてくるのが見えた。PCの調子が戻つたのだろうか？

やがて桜はこちらにたどり着くと、早々に質問を繰り出してきた。

「ここにカインさんが来たつて、掲示板で噂になつてゐるのを見たんですけど……知りませんか？」

早くも話題になつたか……斬魔か、そのサブキャラあたりが情報

収集目的で書き込んだのだね。それを見た桜が口元にやつてきた  
……といったところか。

「はいへへ すりこく強くてかつこよかつたです！ エルくんには  
負けるけどハマハマ」

カインはオレなんだけどな。けど、それをまだ明かすわけにはい  
かない。

「そうですか……やっぱり。カインさんが戻ってきた……戻つてき  
たんだ」

悪いな、桜。まだカインは戻れない。少なくとも、ヴァーミリオ  
ンとのございのほとぼつが冷めるまでは……。

それに、今のオレはエルトとして、ブンを育てなくちゃいけない。  
ブンは……大切な友達だ。

いつか時期が来たらここから話せるだろ？ 1年前の事…  
…リアルのオレの事を。

桜。ごめんね。

でも、いつかまた……エルトとしてではなく、カインとして…  
あなたの前に立ちたい。

\*\*\*\*\*

今日はものすゞく気分がいい。

また、会えるかもしれない。あの人に。

学校までの足取りは非常に軽かつた。

俺はいつもの通学路を少し足早に歩いている。そういうえば、今日は潤を家に連れて行くんだった。まあ、そんなに部屋は散らかっていなから大丈夫だろ？

潤か……。あいつ、相羽さんの弟なんだよな。相羽さんって、家じやどり過ぎしてるんだろうか？ ちょっと気になる。

それに……何で力オス・クロニクルをやめちゃったのかも。

彼女の事を考えていたら偶然、石鹼の匂いがした。俺は振り向く。

「相羽さん！ おはよう！」

振り返つて昨日の夜一生懸命練習した、対相羽 真理奈専用挨拶（改）を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせ、セクシーに指をアゴに添えて見せた。 はず。

「あ、ちょっと待つてよ！」

また無視されてしまった。

さては、今度こそ照れているな相羽 真理奈！？ ふはは。 そうだろうそうだろう。5時間かけて編み出した俺のファイナルウェポンである。これが直撃して無事な女子はいないはず！ ……いない

と思いたい。

「あよ……相羽さん！」

「の展開、昨日と同じ…？ つてことはまさか？ また俺の名前忘れられてる？

不意に相羽さんが立ち止まる。そして、こちらに振り返って微笑んだ。

天使です。翼はありませんが、まさしく天使です。

「おはよーー 渡辺くん」

「あ。う、うん。おはよー、相羽さん」

なんだらう、すく機嫌がいいぞ。何かいい事があつたんだろうか。

「渡辺くん、なんだか嬉しそう。何かあつたの？」  
そうか。俺のファイナルウェポンが炸裂したのだ。心血をそそぎ、ラブコメを見て、主人公の恋敵の動きを一生懸命5時間もトレースした努力が実つたのだ……！

逆に聞かれてしまい、焦つてしまつ。相羽さんにオレのファイナルウェポンが炸裂したからだなんてストレートに言つたら、周りの女子に勘違いされて、俺は稻田2号の烙印を押されかねない。

「…………」

「あ、うん。 そうそう。 昨日カオス・クロニクルで、ちょっといい事があつたんだ」

「何があつたの？」

「昨日話したカインがさ……戻ってきたんだ。俺、もつ合ふないと思つてた。けど戻つてきてくれたんだ、カイン……」

「渡辺くん……」

しまつた。潤の言ひとおり、カオス・クロニクルの話題はNGだつたか。

相羽さんが少し気まずそうな顔をしている。仕方がない。秘密兵器の投入だ。

俺は胸ポケットに入れておいた和菓子を取り出して、相羽さんの柔らかい掌にそつと乗せた。このまま握つていていきたい気持ちをぐつと抑えて、手を離す。

かすかに残つた体温を忘れないよう、自分の掌を握り締める。  
……3日はこの手を洗わない。

「これ、相羽さんにあげるよ。 親父が出張で広島に行つてて、お土産のお福分け」

「ありがとう……」れつて……？

「うん。 もみじまんじゅうだよ。 ハーレーと合つのかな？ 試した



## 俺の妹が……以下略

相羽さんは少し驚いていた。もみじまんじゅうが珍しいのだろうか？ 掌に乗せたそれを、じっと見つめている。

そして、俺の顔を少し緊張した様子で覗き込んで、いつ言った。

「桜……？」

「え」

「な――――ベ――――！」

後ろから衝撃を受け、前に倒れそうになる。目の前には相羽さんのセーラー服。事故と見せかけて飛び込んでしまいたくなるが、俺はそんなに下劣な人間じゃない。

いつかこの胸に相羽さんのほつから飛び込ませてやるんだ。

俺は上半身を思い切りひねり、相羽さんをよけて地面に倒れた。

「渡辺くん、大丈夫！？」

「いたたた。ごめん、相羽さん。ケガない？ 俺は大丈夫。毎日妹に蹴られてるから、体は頑丈なんだ」

「指から血……出ているよ。貸して、私、絆創膏持つてたから貼つてあげる」

「あ、ありがとう」

俺の右手に相羽さんの手が触れる。カバンからキャラクターの  
のかわいらしい絆創膏を取り出し、それを丁寧に俺の指に巻きつけ  
てくれた。

その動作は優しさに満ちている。俺のH-YAは全回復した！ もう  
何も怖くない。いまなら一人で魔童の巣に飛び込んでもいい。まさ  
しく相羽さんは俺のヒーラーだ。

「私……」一つ下の弟がいるんだけど。けっこうどジな子なの。だか  
らいつも、転んだ弟を起こして、こんな風に絆創膏貼つてあげてた  
んだ」

潤のことだ。確かに昨日も盛大に転んでいたな。潤め。くそう。  
あいつが羨ましい。俺が潤だったら毎日転んで、絆創膏だらけにな  
つてもいい。

でも、ちょっとこの絆創膏……かわいらしすぎて恥かしいんだけ  
ど……。

「痛いの痛いのとんだけー

相羽さんはそう言つて俺の指をさすった。

「へ？」

「あ……」

相羽さんは顔を真っ赤にして、うつむいている。

「『じめん、弟にもこうしてたから……その……』

クセになつてゐるのか。潤め、あいつどんだけ転んでるんだ。ドジっ子の領域だな、生きるアニメキャラかあいつは。

「あ、いいよ！ ゼンゼン！ 僕、もう痛くないし…」

素早くそう言つて立ち上がり、正拳突きを10回田の前で繰り出す。痛みなんかどこにもない。あるもんか。今まで生きてきた中で、一番幸せです。

もう死んでもいい。いや、指にケガしただけで死んだら、体がもたないけど。

「渡辺くん。ケガ、大事にね。それとこのもみじまんじゅう……ありがとう。『一ヒー』と一緒にいたくから……それじゃ

「あ、うん。また教室で」

相羽さんの姿が昇降口へと消える。口歎の香りが消えるのと同時に、俺は振り返つて拳を繰り出した。

ズドンと音がして、稻田は吹つ飛ぶ。

「ナベ、『じめん。ちょっとした挨拶のつもりだつたんだ。そつ……これは不器用な愛情表現なんだ！ ほら、よく言つだら、好きな子にはイジワルしたくなるつて！』

「そうか。稻田は俺の事が好きか

「うんうん、大親友だし。同じ工口本を読んだ仲だし。」

同じ釜の飯を食つた仲みたいな使い方をするなと言いたい。

「稻田、俺もお前の事が好きだぜ」

「じゃあ、俺たち相思相愛だなー。じゃ、そういうことだー。」

「までー」

俺は稻田の腹に不器用な愛情表現を叩き込んで、教室へと向った。  
そして、その日の授業が始まり、昼休みになると、相羽さんの周りにまた人垣ができる。

もみじまんじゅう、食べてくれるだろうか……。

その日の授業が終わると、俺は足早に教室を去り駅前へと向った。

駅前はまだ夕方の買い物ラッシュや帰宅ラッシュに巻き込まれておらず、静かに人の波を受け流し、その中に一人の少年をはらんでいた。

「あ、渡辺さん！　ここです」

潤が手を振つてこちらに駆けて来る。子犬のような奴だ。すでに私服に着替えており、ビジネスバッグを小さな体で引きずるようにして抱えていた。

俺の田の前まで来て、潤は足をつまされただ。やばい。今の状態で転んだらロボが壊れるだ。

とにかく潤の体とバッグを受け止めて、元の場所によいしょして戻す。

「危なかつたです……」「めんなさい、渡辺さん」

「ローバーの瓶と違つてロボは精密機器だからな。保証期間中でも、落として壊したら修理費はかかるだ」

「え！ そなんですか……よかつた。まだ買って1月も経つてないから……」「めんなさい渡辺さん、ロボの命を助けて頂いて」

「ピー子？」「ロボはファッショングッズでもできるのだろうか？」

「潤、ピー子つて？」

「ロボの子の名前です。ロボのロボ。かわいいでしょ？？」

潤は満面の笑みでビジネスバッグの中身を俺に見せた。いや、かわいいと言われても……。

「お姉ちゃんも自分のロボに名前付けてるんですよ。めったに呼ばないけど」

「なに？ な、なんて名前なんだ？」

「フランソワーズです」

なんて微妙なネーミングセンスだ！ ちょっと相羽さんのセンスがわからない。

……とりあえず気を取り直して、家に帰るか。

「いや、それより行こうか。もつすぐ電車が来る時間だし……切符は一駅先のを買つんだぞ」

「はいー。」

俺は潤を伴い、駅の発券機の前に立つた。俺には定期があるので買わない。潤の分が必要だ。

潤に譲り、必要な金額を指示する。しかし、潤は発券機の前で止まつたまま虚空を見つめていた。

「潤？」

「あ、あの……ぼく、切符買つたことなくて……いつもお姉ちゃんが買つてくれるから、使い方が……」

潤は……まさか、恐るべきパソコンなのではないか？ いや、逆か？ 相羽さんがブリコンなのか？

とにかく俺は潤に発券機の使い方を教えて、やつてきた電車にぎりぎりで滑り込むと空いている席に座つた。

「お家、近いんですね」

「うん。本当はチャリで行ける距離なんだけれど……電車通学って憧れないか？」

「そうですか？」

「憧れるだろ！ 電車の中でステキな出会いがあるかもしれないし、それにキレイなお姉さんが居眠りして、自分の肩によりかかってたらお前はどう思う！？」

「肩が懲りますね」

「そうだろ、肩が凝るだろ？ つい違つわー。」

俺は潤に電車の中でノリ突っ込みをしてしまった。まあ、実際にキレイなお姉さんが肩によりかかってきたことは無い。

ハゲたおっさんが肩によりかかつたことはある……それも、左右から。肩に残った感触は今も忘れない。悲しい記憶だ。

やがて目的地に着くと、俺と潤は電車を降り、駅の改札から人ごみと一緒に吐き出される。

「うちだよ、潤。迷子になるなよ」

背中に潤の気配があることを確認しながら、帰路を辿る。ものの数分で我が家へと帰り着き、玄関のドアを開けて中に入った。

「おじやまします……」

「ただいま」

玄関で靴を脱ぎ、リビングの家族共用パソコンへと向つ。

俺専用のPCがないので、親父と妹と俺が共有して使つてゐるのだ。

リビングのドアを開けると、PCラックの前に我が最愛の妹がいた。ヘッドホンを付けて、ニンマリ動画とこう動画投稿サイトで何かを見つける。

俺は妹の背後に立つと、肩を優しく揺すつて、それをビヘビヘと頼もうと思つた。

「おー」

返事がない。どうやらただの屁のようだ。

屁にPCは必要ないので、PCラックのイスを引いて、そのままテーブルランペイジさせた。ヘッドホンが差込口から抜けて、大量のアーリングが渡辺家を貫く。

「近所迷惑である。

「愛紗。優しくてかっこいい、お前の大好きな兄ちゃんが帰つてきたぞ」

最愛の妹はヘッドホンを着けたままイスを倒して、俺に向つて走つてきた。きっと、感動のあまり俺の胸めがけて、飛び膝蹴りでも見舞つてくれるのだ。恐るべき照れ隠しである。

そうだったらしいのだが。

最愛の妹は、跳躍するとカカトをめいっぱい振り上げて、俺の頭上に直撃させた。スカートはいてるのに、こんなはしたない事をするなんて信じられない。ていうか、これは新技だ。

俺はこんな子に育てた覚えはないんだが。

しかも頭部にクリティカルヒットだ。スタンだ。ものすごく痛い。

「キモイんだよ、バカ翔。『誰が優しくてかっこいい、お前の大好きなお兄ちゃん』だ？ 神様にクリーニングオフできるならしたいんですけど？」

「それは無理だ。お前はすでに14年と7ヶ月生きている。クリングオフの期限はとっくに過ぎているのさ、妹よ」

これが俺の妹。渡辺 愛紗14歳中学3年生である。

愛紗はセミロングの髪をふわりと揺らし、俺がリビングで妹をワンペイジさせたイスをPICOに戻した。学校から帰つてまだ間もないのだろうか、制服を着たままであった。

「あの……お邪魔します」

「あん?」

潤がおずおずと一步ずつ足場を確かめるようにリビングに入ってきた。それを鋭い目で睨んだ愛紗だったが、途端に目が見開かれて硬直した。

「あの……ぼく、相羽 潤です。昨日、渡辺さん……翔さんと知り合つて……」

緊張してうつむいた潤。それを見た愛紗の時間は止まつたままだ。

「昨日潤と仲良くなつてさ。そんで、こいつもカオス・クロニクルに興味があるつていうんで、俺がPICOにインストールしてセットアップしてやる」とになつたんだ

「……」

愛紗は頬を少し赤らめて未だに潤を見つめていた。

「あの……愛紗さんですよね？ 翔さんから少しお話は聞いています。同じ年みたいだし、仲良くなってくれると……嬉しいです」

今にも消え入りそうな潤のか細い声。そして、潤は愛紗にむせるおやむ右手を差し出した。愛紗はそれをがつちつとつかんで鼻息を荒くし自己紹介を始める。

「あー、あの、あたし渡辺 愛紗です！ 好きな食べ物はインスタントラーメンの固めでででー！」

愛紗は顔を真っ赤にして、セリフを噛みまくった。いつもヒヤヒラが違う。

潤はそれを見てくすりと笑い、愛紗は照れ笑いをしながら頭をぽりぽりとかいていた。

「あー、あたしあ茶入れてきます！ 潤くん、ゆつくりしていいでくださいー。何かあつたら「この役立たず」を使つてくれて構いませんからー！」

そう言つて、愛紗は台所に向つて歩き出した。なぜか油のきれたロボットのよつに歩きかたがぎこちない。

「面白い子ですね。渡辺さんの妹さん……えつと、愛紗ちゃん」

あんな愛紗は初めて見た。まさかあいつ……潤に……。

「田惚れ？」

俺達渡辺兄妹は、偶然にも相羽姉弟に恋をしてしまつたらしく。

まつたく、兄妹そろつて……。

「さて、と。そりだなあ。まずは俺の部屋に行こつか。クライアントロムでインストールして、それからキャラを作つて少し一緒に狩りをしてみよ?」

「はーー。」

潤は力強く頷く。俺はリビングをでて、玄関横の階段を昇り一階の浴室へと向う。浴室のドアを開け、潤に入るよう促した。

「どうぞ」

「お邪魔します……あ

潤は俺の部屋に入つて少し驚いていた。

「「あんな。少し散らかってるけど……適当にかけてくれ」

潤は俺のベッドの上に腰をおろして、溜め息を付いて周りを見回す。

「散らかってるだなんてとんでもないです。すこしキレイなお部屋ですね。きちんと整理整頓されて……つちのお姉ちゃんも見習って欲しいくらいです」

「え?」

「年がら年中散らかり放題なんです。ぼくが片付けてあげるって言つても、『余計なことはするな、この散らかり具合がいいんだ』って言つて怒り出して……足の踏み場がないんですよね」

相羽さんはもしかして、家事能力のなのでは……外見からは想像がつかないけど、相当がさつなのかもしない。

「まあ、俺は物が乱雑に置かれてるとイライラして、直しちゃうんだよね。スーパーの売り場とか、店員でもないのに勝手に整理しちゃつたりとかさ」

「それ、ぼくもわかります。なんだか放つておけないんですね」

潤とヘンな共通点が見つかってしまった。

「じゃあえっと……P子出して」

「P子です」

潤は真面目な顔になつて、きつぱりとそう言つた。

「……P子を出してくれ」

「はいー」

P子と呼ばないとダメらしい。ちよつと面倒くせつな。

ビジネスバッグから出されたP子はまだ買って間もないどころか、ぴかぴかの新品であった。相当大事にしているのだろう。

「お……これって最新機種じゃないか。ブルーレイドライブ内臓、最新のCPUに……4GBのメモリ、うちのボロいデスクトップよりも断然性能がいい……」

Ｐ子のスペックに驚愕する。これだけの性能だ。かなり高額なんだろうな……しかも話を聞く限りだと、これは潤専用の物らしいし、相羽さんもフランケンだったか、フランクフルトっていう名前のＰＣを持つていると潤は言っていた。

相羽家は金持ちか！？ 身分違いの恋でなければいいが……。

・「ほくのＰ子……ダメですか？ カオス・クロニクルできませんか？」

潤は不安な表情でＰ子を見つめていた。

「いや、大丈夫。むしろ推称環境以上だからキレイに映るし、ラグもほとんど無いと思うよ。うちのボロＰＣと交換して欲しいくらい」

「やうですか……渡辺さん家のボロＰＣより上ですか……よかつた」

潤はほつと安堵して胸を押さえた。今、ボロＰＣって言った？ 言ったよね？ 確かにボロいけど、あれには俺の全てが詰まっているんだぞ！

「やう……セレブめ。

潤が目を離してゐる間に、メモリを引っ抜いてやろうかな。などと考えているうちにＰ子は起動して、デスクトップ画面が表示された。

画面には、ゴミ箱と、ウイルスソフトとワードなどのビジネスソフトのショートカットくらいしかなく、なんとも寂しい状態だ。

HDD画像やエロゲーくらい入っててもいいものだが、ハードディスクの容量は数百GB以上が空いている。

まあ、これだけ容量が余っているならカオス・クロニクルのアプリケーションは十分に入るだろう。

俺は机の引き出しがから口ムを取り出して、それをドライブに挿入した。しばらくしてセットアップが始まり、ドライブからはロムの回転音がぶんぶんと聞こえる。

「さて……少し時間がかかるな。そのへんの本でも適当に読んで待つていってくれ。30分はかかるはず……」

「はい。それじゃあ……」

潤は立ち上がり本棚へと向づ。

「すごいですね……渡辺さん、プログラム関係の本がいっぱい……プログラマー目指してるんですか？」

本棚の半分以上を独占しているのはプログラム関係の専門書だ。それを見た潤が感嘆の声を上げた。

「ああ。それ、親父からもらつたのがほとんどなんだよ。家の親父、プログラマーだから」

「なんだか、かつこいいですね」

潤はつるつると瞳をつむわせて感動していた。いや、そんなたい

したものでもないぞ、あのおっさん。

プログラマーになつた理由だつて、自分で理想のエロゲーをプログラミングできるようになりたいだとかいう、不純なものだし。

でも、男手一つで俺と愛紗を育ててくれたのにはすごい感謝してゐるけど……。

「俺も時間が空いてヒマなときは、たまに簡単なプログラム組んでるよ。最近はObjective-Cで遊んでるんだけどね」

「なんの話だかさっぱりです……」

ちなみに、Objective-Cはプログラム言語の一種で、アイフォンやアイパッドのアプリケーションはこの言語で開発されている。親父の趣味に少し付き合つた程度の知識しかないけど。

「おつと、じめん。まあ興味があるならいつか俺がプログラムを教えてあげるよ。けつこう楽しいぜ？ バグが出ずく無事コンパイルできた時は」

と、俺が雄弁に語つていると女子が軽快な効果音を鳴らして、インストールが完了したことを告げた。

「え？ 早すぎだろ！ つちのボロボロなんか一時間近くかかったのに……」

「ほくのマテ。すいじょ？」

マテおわるべし。

「じゃあ、せつそくゲームに接続してみるか。ちよつと待つてろよ、

親父の部屋からLAN取つてくるから

俺はそつとつて自分の部屋を出ると、向かいにある親父の部屋に入つた。

家には家族共用のPCが一台あるが、それとは別に親父が一台持つていて。仕事用ということと入っているOSがMACであることもあって、親父もリビングのPCを使っているのだ。

俺は、親父の机の上にあったMACからLANを抜いて、それを持つて部屋に戻り、P子に差した。

「さて、インストールは終わつたけど、アップデートがまだだからな。またこれから少し時間が……」

かかると思ったが、すんなりと自動アップデートが終了し、瞬く間にP子はゲーム画面を映し出した。

皇子すげえ。

「それじゃあまだせキヤリを作らなければ」とな。以前はもう決めてるのか?」

「はい。ぼくの名前で」

「えー。つまらないな。アニメのキラとかは？ この前、キラ・ヤマモトって奴がいたつけ。あいつ、なかなか面白い奴だったなあ。punch321はちょっと名前の意味がわからないけど

「ぼく、アニメ知らないから……潤でいいです」

潤はそう言って、名前の欄に潤と入力したが、受け付けられなかつた。すでに同じ名前が存在したのだ。

その後、じゅんもダメだったので、ぴゅあと入力したら今度はうまくいった。

ぴゅあつて……何か、すごくかわいらしい女の子を想像する名前だ。

「じゃあ、次……種族だな。ヒューマン、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、オーク、フェイブ……どれにする?」

「一番男らしいのがいいです! ぼく、ゲームの中ではせめて男らしくなりたいから」

「……じゃあ、オークか……」

「はい! うわあ。かつこいいー ぼくこんな風になりたいなあ」

潤は、むきむきマッチョな縁の巨人をすっかり気に入ってしまつたようだ。ていうか、ぴゅあつていう名前とこのビジュアルは見事にミスマッチだ。

体型もちろん、ボディービルダーのような体つきで、背も2メートル以上ありそなぐくらいバカでかい。

これの中身がこんな美少年だと知つたら、みんな驚くだろ? な…

…。

すべての設定を終え、潤はカオス・クロニクルの世界に降り立つた。

いや、ここでは、ぴゅあと言おう。

ぴゅあは、初心者村……ハリの村に降り立ち、周りを走り回つて、見るもの触れるもの、その全てが新鮮なのだろう。

俺も、一年前はそうだったな。そして、装備も何もつけずに狩りをして死に掛けたんだっけ。そこをカインが助けてくれて色々教えてくれた。

俺もカインになろう。潤にとってのカイン。

「潤、P子を持って下に行け。俺もレベルの近いキャラで狩りをして色々教えてあげるよ」

「はい、お願ひします!」

リビングに入り、カオス・クロニクルを起動し、ゲームへ。

キャラクター画面には3人のキャラが佇んでいた。一つの短剣を装備したダークエルフの男……全身を黒いレザーアーマーに身を包んでいる。

ここではレベル差がありすぎるの、隣のヒューマンウェイザーを選択する。下着同然の派手な格好をした若い女で名前はマリアベル……。

「これが一番、ぴゅあとレベルが近い。よし、これにしよう。  
潤。俺が狩りの基本を教えてやる、しつかりついてこよ

## 初めての日

ひゅあは、マリアベルの支援と定番育成ルートを経て、30分もしなういちに15レベルになり、ハリの村を卒業するとミロンの村へと拠点を移した。

もちろん師弟関係を結んでいるので、成長は驚くほど早い。それは取得経験値の増加という意味だけでなく、潤の飲み込みの早さも相まって、1時間を過ぎる頃にはレベルが24になっていた。

「だいぶ慣れてきたな、潤。教え甲斐がなくてちょっと残念だよ。愛紗はここまで来ると倍かかったんだぜ？」

潤にはムダな動きが一切ない。俺のいう事を忠実に守り、俺の指示の一手先を行く行動を取つてみせる。

ちゃんと自分で考えて、最善の選択を取つている。手間のかからない生徒である。学校の成績もかなりいいのではないか。とはいえる『勉強ができる』頭のイイ奴、という図式は社会に出たら当てはまらない』と親父がよく言つていた。

状況判断。観察力。決断力。応用力。想像力。色々な力が必要だとも。俺にはまだこの言葉の意味は解らないけど、潤にはそういうた素養があるのかもしれない。

このおどおどした性格さえ直せば、人の上に立つ立派なリーダーになれるんじゃないかな？

カオス・クロニクルを始めとするMMOでは、他人と面と向つて

話すことは無い。すべてが文字による意思疎通に委ねられる。だから、口下手な奴でもスイスイ発言できるし、口では言えないことだつて、文字でなら数回キーボードを叩くだけで簡単に現せる。

だからこそ、言葉の齟齬や、過剰な表現にならないように気をつける必要がある。とカインが言つていたな。

まったくその通りだつた。

潤がチャットになれて、もつとゲームの経験を積んだら……第一のカインになれるかも……。

「潤はすごいな、まるでカインみたいだ」

「カインって誰ですか？」

「陳腐な表現をすると、ヒーローかな。このゲーム、75レベルが最高レベルなんだけど、74～75の区間は1年間狩りをして、ようやくたどり着けるんだ。カインは数少ない75レベルで、装備もゲーム内最強の物をそろえてた。でも、カインがすごいのはそこじゃない。カインは無敵なんだ。どんなに不利な状況でも、覆しちまう。ギルド戦争で灰色の狼が全滅寸前だつたのを、とつさの機転と奇策でひっくり返したこともある」

あれは今も忘れない。あのギルド戦争で灰色の狼はサーバー最強の戦力と規模を誇示するようになつた。

そのこともあつて、俺はカインに男惚れした。この人になら全部賭けてもいい。それだけの価値のある人だと思ったんだ。けれど、カインが去つてからギルドは大きく変わつた。だから、俺もそこに

用は無い。

カインがいる所が俺の場所なんだ。俺はカインの指示で動く。カインの剣で盾だ。

「すごい人なんですね、カインさんって……どんな人なんだ」  
「案外、女の子だったりしてな。俺や潤とそう変わらない年かもしない」

「じゃあ、家のお姉ちゃんかもしませんね」

「ははは。そうだつたらすごいにな。もしそうなら、俺びっくりして学校を半裸で逆立ちして爆走するよ」

そんな事、あるわけないさ。カインは男だ。一人称は『オレ』だし。相羽さんがカインだなんて、ありえない。

「そういえばさつき、愛紗ちゃんの名前が出ましたけど、愛紗ちゃんもやつているんですか？」

「ああ。ていうか、このマリアベルは愛紗のキャラなんだ。俺と愛紗で一つのアカウントを共有しているからな。俺のキャラは一人だよ。ちなみに愛紗の奴、生意気にもギルドマスターなんかやつてんだよな」。ほら、さつき黒いダークエルフいたる？ あれが愛紗のメインキャラなんだ

「へえ、いいな……兄妹でゲームしてるんですね」

「まあ、数少ない共通の話題だな。兄妹って言つても、男と女だか

ら、昔は話す話題もいつぱいあつたけど、今はそんはずいがないだろ？ カオス・クロニクルが今や唯一の兄妹の繋がり……つてちょっと悲しいか

「いえ、羨ましいです。ぼくもお姉ちゃんとお話したいけど、何を話せばいいか解らなくて……でも、カオス・クロニクルの話題は禁止だし……」

「そりか……潤のねーちゃんの趣味つて他にないのか？」

さりげに相羽 真理奈情報をゲットできるチャンスが到来した。

「お料理ですね……。インターネットで見たレシピを試して色々作ってくれます。この前は鶏レバーの甘辛煮を作ってくれたんです。臭みが無くておいしかったな」

料理！ 僕と同じだ。実は渡辺家の食事は僕が担当している。

母親はいないので、親父がインスタントや冷凍食品、スーパーの惣菜しか用意できない。そこで、僕が料理を覚えて腕を振舞つているのだ。

カオス・クロニクル以外の共通点……ようやく見つけた！ これで相羽 真理奈攻略計画は第一段階に進むぞ。

「つと。そろそろ休憩してリロンに戻らつか。クエストも一回清算しどかないと」

ひゅあは俺と一緒にゴブリン前線基地の最奥で、ヒリートゴブリンを狩っていた。20代はここが一番効率がいいのだ。

「はい！……あれ？なんか、黒い物が落ちていませんか？なんか、黒い物が落ちていませんか？」  
「ひひひ！」

潤の言つ通り、田の前には黒い物体が落ちていた。あれは……。

ダメだ！あれに近づいたらダメだ！

「潤、ぴゅあをすぐにそいつから放せ！それで、すぐここを離れるべー！」

「え？」

しかし、潤はすぐに動くことが出来ず、ぴゅあは黒い物体……そいつに取り込まれた。

「なんですか？」これ？ぼくのぴゅあがじつじつしたヘンな奴に変身しちゃいました！」

「潤。そいつは魔剣だ。魔剣はワールド内を徘徊して、近くにいるプレイヤーに寄生する。そいつに寄生されたプレイヤーは魔剣に呪われて姿を変えられる。でも、安心しろ。時間が経てば元に戻るし、魔剣装備中はステータスが飛躍的に上昇するんだ。その状態なら、レベルが10以上上の相手でも狩れるぜ？」

「ほんとですか？じゃあ喜んでいいのかな。でも、ぴゅあの愛らしさがどにもないです……こんな黒くてひつひつしたの、ぼく、好きじゃありません……」

魔剣に取り込まれると、強制的に『魔剣士シャドウナイト』へと

変貌させられる。シャドウナイトは、全身から黒い蒸気を噴出し、漆黒の鎧に身を包んだ禍々しい存在であるが、ビジュアルには人気がある。

少なくとも、10人が見たら10人ともぴゅあよりシャドウナイトの方が断然いいと言うだろうが……。

「あれ？ 何だらう、魔法が飛んできた？」

シャドウナイトが、一瞬氷の槍に貫かれた。

「ん？ ここのあたりにMOBはないだろ……見間違えじゃ……」

見えた。見間違いじゃない。いる。

エルフウィザードだ。今のはあいつのスキル、『アイスグレイブ』だな。名前は……加齢の王子様。なんだこいつ、ネタキヤラか？

加齢の王子様はエルフの少年で、青いローブに身を包み、魔法書を広げて俺たちから少し離れたところに立っていた。

「HAHAHA！ シャドウナイトよー 覚悟しろ、今度こそは我が魔剣を貰い受けるー！」

「ひや……。

「潤。逃げようが、たぶんこいつ魔剣ハンターだ。さつきもいったけど、魔剣士ってステータスが飛躍的に上がるから、それを田端で魔剣を追つてる連中もいるんだよね」

魔剣ハンターの目的は、魔剣を所有者から奪つてそれで狩りをすることだ。魔剣士は戦闘不能になると魔剣から解放され、それを倒したのがプレイヤーならそいつが次の魔剣の所有者になる。

だから、わざといいつにやられて魔剣を譲ったほうがいい。いつ  
いつ輩は何時間でもへばりついて、空気を読んでくれない。

「潤。 しうがないから、わざとこいつにやられるんだ。 大丈夫、戦闘不能になつたら俺が神祕の復活薬で蘇生してやるから気にするな。 」 こういう連中は 「

俺が言う前に、すでに加齢の王子様は地面に横たわり、戦闘不能になっていた。

「あれ？」

後ろからやつてきたエリートゴブリンが、加齢の王子様を一撃で瞬殺してしまった。とりあえず、ターゲットをこちらに移したゴブリンに向けて魔法を放ち掃除しておく。

「HAHAHAHA！ やるな、シャドウナイトよ！ だが我は決して諦めん！ また会おう！ その時までその魔剣預けるぞ！」

最後はシャウトでそう叫んで消えて行つた。一体なんなんだあいつは……もしかして、キラ・ヤマモトの別キャラだらうか？

今度こそ帰るつと思つたのに、また他の魔剣ハンターがやつてきた。今度は加齢の王子様のような低レベルのプレイヤーではない。

灰色の狼の現ギルドメンバーだ。しかもあいつは、俺と同じ時期

に入つて、カインに色々教えてもらつていた……左 翔太朗。

あいつとはあまり仲がよくない。基本的に無口で何を考えているか解らないからだ。狩りに没頭すると、ギルドチャットでは何も発言しないどころか、挨拶すらしない。いるのかいないのか、はつきりしないなんとも無愛想な奴なのである。

思つたとおりに、あいつは何も告げずにぴゅあの魔剣を奪おうと攻撃を繰り出してきた。

シャドウナイトになつてゐるとはいへ、ぴゅあはまだ24レベルだ。

左 翔太朗のレベルは68だつたはず……しかもダークエルフエンチャンターで、遠近数種類の武器を持つていて、それを状況に分けて使いこなす。

本人曰く、フォームチョンジらしい。ただ武器を装備し直すだけなのに。

左 翔太朗は『』でシャドウナイトを狙い撃つ。強力なバフがかけられているため、本職のそれと同程度の威力の矢がシャドウナイトに突き刺さる。

矢を発射したのと同時に左 翔太朗は一気に距離を詰め、デュアルソードに装備を持ち変えると、それでシャドウナイトを十文字に切り裂く。その全てがクリティカルヒットして、ぴゅあは魔剣から解放された。

「ああ……ぼくのぴゅあが……」

「大丈夫、すぐに俺が蘇生するよ。だからここで待っていてくれ」

「せっかく、育てたのに……」

魔剣を奪うためとはいってもPKと同じだ。魔剣システムは、奪い合うことが前提のため、魔剣所持者がプレイヤーに倒されても経験値が減ることはない。

だが……始めたばかりの潤にはそんな事がわかるはずもないし、関係ないだろう。しゅんと落ち込んだ潤の横顔……口の中に苦い味が広がる。潤がかわいそうだ。すぐに蘇生してやるつ。そして、もつといっぱい狩りをして、今の沈んだ気持ちを吹き飛ばしてやるんだ。

俺は、そう決めて前を見た。

左 翔太朗の足元に落ちた魔剣……それは、左 翔太朗を新しい主と認め、魔剣士へとその姿を変えさせる。

さあ。さつさと行け。お前の目的は達成しただろう？

俺たちはまだここで狩りの続きをするんだ。

早く行ってくれよ。

左 翔太朗は帰るそぶりを見せらず、俺に……マリアベルに向つて歩いてくる。黒い蒸気を引き連れて、漆黒の鎧が魔剣を振りかざし、それを振り下ろした。

野郎。試し切りか。

マリアベルのHPは即座に0になる。

「いつ……カインに何を教わった？ 自分よりレベルの低いキャラの相手をするなんて……。

「渡辺さん……ぼくが渡辺さんのいう事を聞かなかつたばかりに……」「めんなさい。本当に、ごめんなさい」

「別にお前のせいじゃないよ。相手が悪かつたんだ、気にするな」

俺はまだいい。しかし……。

「『めんなさい』」

潤は涙目になっていた。相当責任を感じているらしい。

魔剣なんて興味は無い。けれど……潤の仇をとつてやりたい。

好きな子の弟だから、親切にしてるわけじゃない。潤はいい子なんだ。泣き虫だけど、正直で今一つはつきりしない所もあるけど、いい子なんだ。

俺は……潤にとつてのカインになる。

あの日、俺を助けてくれたカインのようだ、俺が潤を助ける。

左 翔太朗は魔剣士状態だ。今ならば、魔剣を奪うという立派な名目がある。灰色の狼にケンカを売りに行くワケじゃない。

魔剣士になつた左 翔太朗のステータスがいかほどのモノかは知らない。

けれど、やつてやる！

正々堂々と、真っ向勝負だ！

「潤。ちょっとそのまままで待つてろよ。あいつには前から色々と借りがあるんだ。お前のカタキをとるついでに、ここで一気に返してやる！」

「え？」

俺はリスタートする。

愛紗のキャラは2人。俺のキャラは1人。唯一の俺の分身を選択する。

長い銀髪と、白い素肌。赤い瞳。フェイブの証だ。

「行こうぜ、桜。あいつを正々堂々真正正面から倒す！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

---

カオス・クロニクル

2012年1月8日22時53分発行